

## 2020 年度活動報告

### 九州・沖縄昆虫研究会第 7 回例会

九州・沖縄昆虫研究会第 7 回例会は、九州昆虫セミナーとの合同で、2020 年 11 月 14 日（土）にオンラインにて開催された。以下の 2 題の講演が行われ、参加者は 23 名であった。

1. 潜葉性小蛾類モグリチビガ科 *Ectoedemia* 属の多様性  
屋宜 禎央（九州大）
2. 昆虫とストレス研究  
早川 洋一（佐賀大）

### 九州・沖縄昆虫研究会第 4 回大会

令和 2 年度九州・沖縄昆虫研究会大会は、2020 年 12 月 12 日（土）にオンラインにて開催された。以下の 1 題の特別講演と 6 題の一般講演が行われ、参加者は 51 名であった。

#### 特別講演

保全的生物的防除を基幹とした総合的害虫管理 ～ 生物多様性は農家に役立っている？

大野和朗（宮崎大・農）

昆虫学分野の重要な役割のひとつに、農業害虫の防除や天敵利用、生態系サービス（自然制御）などの調整機能に関する基礎・応用研究や技術開発がある。その取り組みには、昆虫分類学、昆虫生態学、昆虫生理学などのさまざまな分野の研究者、研究者の卵？、技術者が関わり、今後もその役割は大きいと思われる。応用場面では、害虫防除の重要な概念として総合的害虫管理（IPM）が広く認知されている。しかし、日本は化学農薬の使用量では先進国中でもトップに位置している。一方、EU では、農業の役割を単なる食糧生産としてではなく、生物多様性の維持向上という点からも重視し、減農薬栽培や有機栽培が推進されている。本来、多様な防除手段を組み合わせ、化学農薬への依存度を軽減するというのが IPM の理念であり、化学農薬は最終解決手段(last resort)とされている。しかし、残念ながら、生産現場ではまず初めに化学農薬ありきとなっている。本講演では、IPM の実行性に関わる問題点、農家圃場での害虫管理に生物多様性が寄与できるのか、現在進めているタバココナジラミやツマジロクサヨトウに対する保全的生物的防除の取り組みを紹介しながら、地域に生息する土着天敵をどのように農業の中で役立てるかを考える。

## 一般講演

### 1. トビバッタ類のフンに含まれる産卵阻害物質の探索 (予報)

○坂田周平 (佐賀大・農) ・石丸幹二 (佐賀大・農) ・菅原亮平 (弘前大・農生)  
・徳田 誠 (佐賀大・農)

サバクトビバッタやトノサマバッタなどの相変異を示すトビバッタ類は、しばしば大発生して農作物に甚大な被害を及ぼす害虫である。先行研究から、これらのバッタ類のフンには、同種の産卵を阻害する水溶性の化学物質が含まれていることが明らかになっている。本研究では、サバクトビバッタとトノサマバッタのフン、および、餌として使用したイヌムギの葉から水溶性成分を抽出し、HPLC解析によって含有物質を比較した。また、フンの水抽出物の分画産物をトノサマバッタ成虫に供試し、産卵阻害効果を確認した。サバクトビバッタとトノサマバッタのフンからは、いくつかの類似したピークが確認され、両者のフンに共通した物質が存在することが示唆された。一方、イヌムギでも検出時間が類似したピークが確認されたが、物質の吸光パターンが異なることから、フンに含まれる物質とは構造が異なることが示唆された。分画産物を用いたトノサマバッタの産卵試験では、一部の分画産物で産卵数が減少したことから、当該画分に産卵阻害物質が含まれている可能性が高いと考えられた。

### 2. 日本産ツツジグンバイ属 (カメムシ目グンバイムシ科) のミトコンドリア COI 遺伝子の解析

○相馬 純 (九州大院・生資環)

グンバイムシ科 (カメムシ目) は、世界から約 2,600 種、日本から 30 属 84 種が記録されている (山田・石川, 2016; Souma, 2019; Schuh & Weirauch, 2020, etc.)。しかしながら、多くの学名未定種が確認されており (石川ら, 2012; 安永ら, 2018), さらに分類学的研究が望まれる。

ツツジグンバイ属は日本から 28 種が知られ、東アジアで多様化し、多くの種がツツジ科とクスノキ科に寄生する (石川ら, 2012; Souma, 2020)。両科に寄生する種は、たがいに外観が酷似し、同定が困難であり、一部の種に地域変異が存在する。さらに、少なくとも 7 未同定種が確認されている。したがって、本属の日本産種に対して包括的な分類学的研究が必要である。

演者は、ツツジグンバイ属の 16 既知種と 2 未同定種、本属に近似のヒメグンバイ属の 2 種を対象にミトコンドリア COI 遺伝子を解析した。その結果、この遺伝子は多くの種の識別に有効だったが、常緑ツツジ科植物に寄生する種では、外部形態に差異が存在する一方、種の識別に有効でなかった。母系遺伝のミトコンドリア DNA では、父系の遺伝情報は解析できないので、演者は、母系と父系の双方の遺伝情報をもつ核 DNA の解析を今後行う予定である。

### 3. コウモリガ幼虫巢に共生するハネカクシの生態と分類

○野崎 翼 (九州大・農) ・丸山宗利 (九州大・総合研究博)

ハネカクシ科に属するヒゲブトハネカクシ亜科には、アリ、シロアリなどの社会性昆虫の巣や、哺乳類、鳥類の巣に共生するものが多く知られている。しかし、本亜科でも蛾の幼虫と関わりを持つものはほとんど知られておらず、コウモリガ科幼虫の巣と強い関係性を示すヒゲブトハネカクシは北米から *Tachiona* 属の 8 種が知られるのみで、旧北区での正式な観察例はこれまでなかった。今回、伊都キャンパスにおける調査でコウモリガ幼虫巢から 3 種のヒゲブトハネカクシが得られた。このうち、*Hoplandria spiniventris* は顕著な種であるにもかかわらず、他の採集法が知

られていないため、コウモリガの巢に依存的であることが予想された。そこで *H. spiniventris* について詳細な生態観察を行ったところ、本種は初齢幼虫から羽化までのすべてのステージをコウモリガ幼虫巢内で過ごしている可能性が高いことがわかった。また今後、近縁種を含めた系統学的な研究を行うことを考え、本種の成虫を詳細に観察し、分類学的な再検討を行った。その結果、現在所属している属には属さず、本種をもとに新属を設立する必要があると考えられた。

#### 4. 日本産チビゾウムシ族 (Coleoptera: Brentidae: Nanophyinae) の分類学的研究

○安川怜志 (九州大院・生資環)

ゾウムシ上科は 5800 属、約 62,000 種が記載されている非常に大きいグループであり、長い鼻のような口吻 (産卵管的口吻) を獲得したことであらゆる植物種や植物基質に対応して放散してきた多様性も非常に高いグループである。植物との深い関係を持つ植食性昆虫は種と生態学的ニッチが共に非常に多様であることから、適応放散のメカニズムを研究するためには優れたモデル系とみなされてきた。しかし、本上科の分類学的研究、系統学的研究は大幅に立ち遅れている現状である。チビゾウムシ科チビゾウムシ亜科は、ゴール形成者を含む植食者であり、寄主植物が属レベルの単食性、狭食性であるので、進化学的に興味深い研究対象である。また興味深い特徴として、寄主植物が同じであるにも関わらず、種間や属間で異なる摂食部位を持つことで食分けを行うことも知られている。日本産のチビゾウムシには 5 属が確認されている。そのうち 4 つの属は古い時代の研究において 1 つの属 (*Nanophyes*) にまとめられていたが、近年の分類学的研究により分割された。しかしながら、日本産既知種については属の所属の検討が未だ不十分である。本発表では日本におけるチビゾウムシの分類学的研究について紹介する。

#### 5. 国内の自然植生からの幼生生殖タマバエの発見と室内累代飼育系の確立

○古川晶啓 (佐賀大・農) ・澤島拓夫 (近畿大・農) ・湯川淳一 (九州大)  
・徳田 誠 (佐賀大・農)

ハエ目タマバエ科は、昆虫の科の中では例外的に食性の幅が広く、植食性で虫えいを形成するものに加え、腐食性や菌食性、捕食性、内部寄生性の種が知られている。菌食性のタマバエの中には、幼生生殖 (“母幼虫” が無性生殖的に “子幼虫” を産む) という極めて特殊な繁殖様式を持つものが知られており、短期間に急激に増殖可能であることから、海外では深刻なキノコ害虫として知られている。国内でも、海外から輸入した菌糸由来と考えられる幼生生殖タマバエがキノコ栽培施設内で発生した事例はあるが、土着の種はこれまで知られていなかった。演者らの調査により、国内の自然植生から複数種の幼生生殖タマバエが確認された。また、エノキタケ菌糸を用いてこれらの室内累代飼育を試みた結果、多くの種を飼育することができた。本発表では、国内で確認された幼生生殖タマバエの予備的な同定結果、および、一部の種を異なる温度で飼育した場合の発育増殖特性について紹介する。

#### 6. 木材穿孔性昆虫に寄生するヒメバチ科の産卵管形態

○小山誠太郎 (九州大・農) ・紙谷聡志 (九州大院・農)

ヒメバチ科は、コウチュウ目をはじめとする様々な昆虫を寄主として利用することから、寄主もしくは寄主が生育する植物組織などに産卵管を突き刺して産卵する。オナガバチ亜科などは、木材穿孔性のキバチ類の幼虫などに産卵するために、長い産卵管を曲げて倒木などに刺す行動をする。近年、このような座屈に対する優れた耐久性をもつ産卵管は、手術で直接脳に介入する操

作可能な針のモデルとして注目されている。耐久性を上げる要因の一つとして、産卵管先端の歯の形態が重要だと考えられている。しかしながら、産卵管の形態が観察されているのは、25,000種以上が知られるヒメバチ科の中のごく一部であり、産卵管形態の多様性についてはほとんど研究が行われていない。そこで、本研究では、木材穿孔性昆虫に寄生するヒメバチ科の産卵管形態の多様性を明らかにすることを目的とした。さらに、産卵管は刺す対象に適応しているかについて考察を行うことも目的とした。材料には、木材穿孔性昆虫におもに寄生するヒラタヒメバチ亜科群の5亜科32種とその外群の4科2亜科6種について、デジタル顕微鏡および走査電子顕微鏡を用いて100～800倍で観察を行った。産卵管の形の評価は、幾何学的形態計測を用いた。

2020年12月12日

九州・沖縄昆虫研究会幹事 紙谷聡志

#### 九州・沖縄昆虫研究会 2019年度会計報告（2020年12月11日締）

##### 収入

前年度（2019年11月28日締）繰越分	331,300円
合計	331,300円

支出（なし）	0円
合計	0円

差引残高 331,300円

2020年12月11日

九州・沖縄昆虫研究会 会計幹事 細谷忠嗣

#### － 原 著 －

##### 541 (Hem.: Cicadellidae) 北部九州におけるサカキブチヒメヨコバイ

紙谷聡志・大原直通（九大院・農・昆虫）・林正美（九大・博）

サカキを寄主植物とするサカキブチヒメヨコバイ（新称）*Stictotettix cleyarae* N.Ohara, M.Hayashi et Kamitani, 2019 は、ヒサカキを寄主植物とするヒサカキブチヒメヨコバイ（新称）*S. morisihmai* N.Ohara, M.Hayashi et Kamitani, 2019 と共に新属新種で記載されたヨコバイである。本種は、滋賀県産の標本をタイプとして、本州（静岡以西）、四国（徳島）、九州（宮崎）に分布することが知られている。

生息地である和歌山県や宮崎県などに共通する特徴はサカキの生産が盛んであることであるが、北部九州の佐賀県三養基郡基山町でもサカキの栽培が2003年より始められている。これまで、筆者らは北部九州においてサカキを寄主植物とするヨコバイ類の探索を行ってきたが、本種は確認できてこなかった。しかしながら、佐賀県林業試験場の林崎 泰氏からの同定依頼によって、スギ・ヒノキ林床に植栽されているサカキから採集された本種の標本を確認したため、ここに報告する。

[採集標本データ]

1♂ 3 nymphs, 佐賀県基山町城戸, 2018年3月28日, 林崎 泰採集.

[引用文献]

Ohara, N., Hayashi, M., & Kamitani, S. (2019) New genus of dikraneurine leafhopper (Hemiptera: Cicadellidae: Typhlocybinae) from Japan, with description of two new species. *Zootaxa*, 4629: 271–279.

5 4 2 (Hym.: Sphechidae) 福岡県北九州市平尾台でフジジガバチを目撃

大對桂一 (福岡市)

フジジガバチ *Ammophila clavus* Fabricius はアナバチ科の有剣ハチ類で、雌は腹柄節や脚が橙色であること、雄は全身が淡い藍色金属光沢を帯びた黒色であることにより、日本産の同属他種と区別される。本種は、日本国内では本州から八重山諸島にかけて広範に分布するものの、本土域における生息地は局所的で、2020年改訂の環境省レッドリスト(環境省, 2020)において準絶滅危惧に選定されている希少種である。九州本土においては、近年まで記録が乏しかったものの、河野・山元(2013)、村尾(2013)によって鹿児島・宮崎・熊本・長崎県で生息が確認され、草原環境を生息地として好むことが示唆されている。

今回、福岡県北九州市にある平尾台にて本種を確認したため、以下に記録を報告する。なお、観察地は特別保護地区内のため、全て目視で記録し、同時に見られた最大個体数を計上した。

[確認個体データ]

2♂3♀, 福岡県北九州市小倉南区, N33° 76'15", E130° 90'21", 27. IX. 2020, 訪花植物: マルバハギ, シラヤマギク, ヤマハッカ.

確認環境は草原内の裸地化した散策道上(図1)であり、雄が雌にアタックする様子(図2)、鱗翅目の幼虫(ヤガ科ヨトウガ亜科の一種)を巣穴に運び込もうとする様子(図3)等が観察された。また、周囲に自生するマルバハギ, シラヤマギク, ヤマハッカへの訪花も観察された。観察地は200m程度の道であったが、足元を頻りに飛び交う様子がみられ、当地での個体数は少ないものと推測される。

本報をまとめるにあたり、松田隆嗣氏(長野市)には鱗翅目幼虫の同定を賜った。また、河野太祐氏(九州大学総合研究博物館)には有用なご助言を頂いた。ここに深謝の意を表す。



図1-3. 1, 確認環境; 2, 雌にアタックする雄; 3, 獲物を運ぶ雌.

[引用文献]

河野太祐・山元宣征(2013) 希少種フジジガバチ(ハチ目: アナバチ科)の九州における生息環境について. *Nature of Kagoshima*, 39: 109–111.

環境省(2020) 環境省レッドリスト 2020 の公表について. 令和2年3月27日公表.  
<https://www.env.go.jp/press/107905.html>

村尾竜起 (2013) 熊本県阿蘇地方からフジジガバチを記録. *Pulex*, (92): 613.

#### 5 4 3 (Hem.: Tingidae) *Stephanitis (Stephanitis) raphiolepidis* の渡嘉敷島からの初記録

相馬 純 (九大院・生資環・昆虫)

*Stephanitis (Stephanitis) raphiolepidis* Souma, 2020 は粟国島から知られ, ホソバシャリンバイ *Raphiolepis indica* (L.) Lindl. var. *liukuensis* (Koidz.) Kitam. の葉裏に寄生する (Souma, 2020) .

著者は, 渡嘉敷島で本種を採集したので, 同島初記録としてここに報告する. 検視標本はすべて著者が採集し, 保管している.

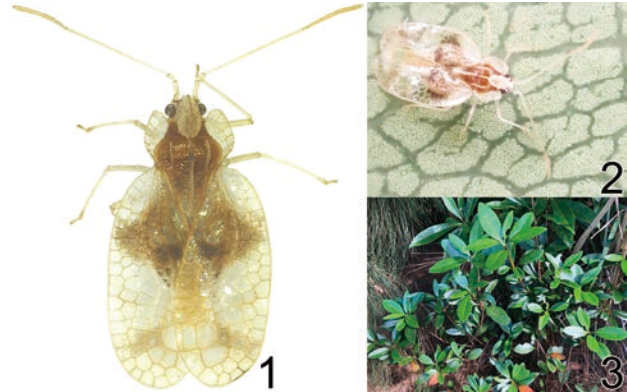


図 1-3. 渡嘉敷島産 *Stephanitis (Stephanitis) raphiolepidis*.  
1, 乾燥標本; 2, 生体; 3, 寄主植物ホソバシャリンバイ.

#### [検視標本]

1♂2♀ (図 1, 2) , 琉球沖縄諸島渡嘉敷島渡嘉敷 (Ryukyus, Okinawa Isls., Tokashiki Is., Tokashiki) , 7-8. XI. 2020.

上記の個体すべてが海沿いのホソバシャリンバイ (図 3) の葉裏から得られた.

#### [引用文献]

Souma, J. (2020) *Stephanitis (Stephanitis) raphiolepidis* sp. nov. (Hemiptera: Heteroptera: Tingidae) from Japan: First representative of the genus feeding on the evergreen rosaceous plant. *Journal of Insect Biodiversity*, 17(2): 36-47.

#### 5 4 4 (Hem.: Tingidae) *Idiocysta takarai* の与那国島からの初記録

相馬 純 (九大院・生資環・昆虫)

*Idiocysta takarai* Souma, 2020 は石垣島と西表島から知られ, ツルアダン *Freycinetia formosana* Hemsl. の葉裏に寄生する (Souma, 2020) .

著者は, 与那国島で本種を採集したので, 同島初記録としてここに報告する. 検視標本はすべて著者が採集し, 保管している.

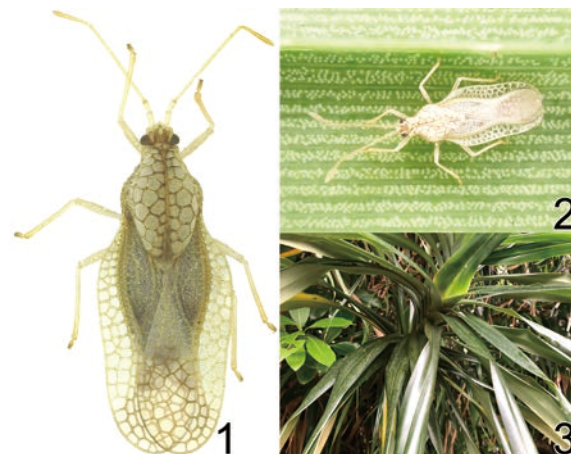


図 1-3. 与那国島産 *Idiocysta takarai*.  
1, 乾燥標本; 2, 生体; 3, 寄主植物ツルアダン.

#### [検視標本]

6♂8♀ 2 nymphs (図 1, 2) , 琉球八重山列島与那国島満田原 (Ryukyus, Yaeyama Isls., Yonaguni Is., Mantabaru) , 11-14. XI. 2020.

上記の個体すべてが林縁のツルアダン (図 3) の葉のビーティングにより採集された.

#### [引用文献]

Souma, J. (2020) Discoveries of the genera *Baeochila* and *Idiocysta* from Japan, with descriptions of two new species (Hemiptera: Heteroptera: Tingidae). *Zootaxa*, 4731(3): 388-402.

#### 5 4 5 (Col.: Chrysomelidae) 伊良部島初記録のキムネクロナガハムシ

小浜継雄 (沖縄県宜野湾市) ・砂川博秋 (沖縄県宮古島市)

キムネクロナガハムシ (ナガヒラタハムシ) *Brontispa longissima* (Gestro, 1885)は、台湾、フィリピン、ジャワ、セレベス、モルッカ諸島、マレー半島、ニューギニア、オセアニアに分布するココヤシなどヤシ類の大害虫である (木元, 1980; 木元・滝沢, 1994; Takasu et al., 2010; 滝沢, 2014) . 日本国内では、1978年に沖縄島で発見された (東・金城, 1978) . その後、本種は琉球列島において分布域を拡大し、沖永良部島、与論島、沖縄島、宮古島、多良間島、石垣島、西表島、小浜島、与那国島の9島から記録されており、さらに小笠原諸島からも知られている (木元, 1980; 東, 1986; 東・金城, 1987; 東・金城, 1989; 大林, 2002; Takasu et al., 2010; Takano et al., 2011) . 筆者らは、これまで記録のなかった伊良部島 (沖縄県宮古島市) で本種を採集しているので報告する.



図1. 伊良部島産キムネクロナガハムシ.

#### [採集標本データ]

3 exs., 27. VII. 2014, 伊良部島渡口の浜, 小浜継雄採集 (図1);  
1 ex., 27. VII. 2014, 伊良部島伊良部, 砂川博秋採集; 1 ex.,  
28. VII. 2014, 伊良部島佐和田, 砂川博秋採集.

以上の標本は琉球大学博物館 (風樹館) に保管されている.

公園やビーチなどに植栽されたココヤシで本種の発生を確認し採集した.

末文ながら、宮古諸島における昆虫相調査に便宜を図っていただいた、宮古島市史編さん室の方々に感謝申し上げます.

#### [引用文献]

- 東 清二 (1986) 沖縄の移入昆虫—南からの侵入者たち. 桐谷圭治 (編) 日本の昆虫—侵略と攪乱の生態学: 115–121. 東海大学出版会. 東京.
- 東 清二・金城政勝 (1978) 沖縄本島から新しく記録されるヤシ類の害虫2種. 沖縄農業, 14(2): 21–25.
- 東 清二・金城政勝 (1987) 沖縄産昆虫目録. 422 pp. 沖縄生物学会. 沖縄.
- 東 清二・金城政勝 (1989) 与那国島の昆虫相. ヨナグニサン保護増殖検証事業報告書: 25–56. ヨナグニサンを守る会.
- 木元新作 (1980) 熱帯アジアのハムシ類—4, 熱帯作物のハムシ類害虫. 科学と実験, 31(7): 50–54. 共立出版.
- 木元新作・滝沢春雄 (1994) 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 539 pp. 東海大学出版会. 東京.
- 大林隆司 (2002) 小笠原の外来昆虫. 村上興生・鷲谷いづみ (監) 日本生態学会編, 外来種ハンドブック: 239–240. 地人書館. 東京.
- Takano, S., Mochizuki, A., Konishi, K., Takasu, K., Alouw, J. C., Pandin, D. S. & Nakamura, S. (2011) Two cryptic species in *Brontispa longissima* (Coleoptera: Chrysomelidae): evidens from mitochondrial DNA analysis and crosses between the two nominal species. *Annals of the Entomological Society of America*, 104: 121–131.
- Takasu, K., Takano, S., Konishi, K. & Nakamura, S. (2010) An invasive pest *Brontispa longissima* (Gestro)

(Coleoptera: Chryomelidae) attacks an endemic palm in the Yaeyama Islands, Japan. *Applied Entomology and Zoology*, 45: 137–144.

滝沢春雄 (2014) 日本産ハムシ科生態覚書(8). 神奈川虫報, (182): 37–46.

#### 5 4 6 (Dip.: Conopidae) 宮古諸島におけるサンタロメバエの採集記録

小浜継雄 (沖縄県宜野湾市) ・砂川博秋 (沖縄県宮古島市)

サンタロメバエ *Conops santaroi* Ôuchi, 1939 (メバエ科) は, トカラ列島中之島, 奄美大島, 沖縄島, 宮古島, 石垣島, 西表島から記録されている (屋富祖, 2002; 三枝, 2008; 中村ら, 2014). 筆者らは, 宮古諸島の宮古島, 来間島, 伊良部島および多良間島において本種を採集しているので分布記録として報告する. なお, 本種は来間島, 伊良部島および多良間島から初記録と思われる.

##### [採集標本データ]

宮古島: 1 ex., 4. VII. 2009, 大野山林, 砂川博秋採集; 1 ex., 11. VII. 2009, 大野山林, 砂川博秋採集; 4 exs., 18. VII. 2009, 大野山林, 砂川博秋採集; 1 ex. (図1), 20. VII. 2009, 大野山林, 砂川博秋採集; 1 ex., 25. V. 2014, ウィピア, 砂川博秋採集; 3 exs., 22. IV. 2015, 城辺新城, 小浜継雄採集; 1 ex., 22. IV. 2015, 下地上地, 小浜継雄採集; 1 ex., 22. IV. 2015, 下地上地, 砂川博秋採集; 1 ex., 23. IV. 2015, 城辺新城, 砂川博秋採集; 1 ex., 12. V. 2015, 城辺加治道, 小浜継雄採集.

来間島: 1 ex., 29. III. 2014, 砂川博秋採集; 1 ex., 21. V. 2016, 小浜継雄採集.

伊良部島: 1 ex., 18. V. 2013, 白鳥岬, 小浜継雄採集; 1 ex., 18. V. 2013, 牧山, 砂川博秋採集.  
多良間島: 2 exs., 11. V. 2013, 宮古市の森, 小浜継雄採集.

以上の標本は琉球大学博物館 (風樹館) に保管されている.

本種は7月に出現するとされている (三枝, 2008) が, 今回の調査結果では, 3~5月と7月に採集されている.

宮古諸島における昆虫相調査に便宜を図っていただいた, 宮古島市史編さん室の方々に感謝申し上げます.

##### [引用文献]

中村剛之・三枝豊平・諏訪正明 (2014) 双翅目. 日本昆虫学会日本昆虫目録編集委員会 (編) 日本昆虫目録第8巻. 1101 pp. 樺歌書房. 福岡.

三枝豊平 (2008) メバエ科. 平嶋義宏・森本 桂 (監) 新訂原色昆虫大圖鑑: 348–349. 北隆館. 東京.

屋富祖昌子 (2002) ハエ目. 東 清二 (監) 増補改訂 琉球列島産昆虫目録: 341–390. 沖縄生物学会. 沖縄.



図1. 宮古島産サンタロメバエ.



#### 5 4 7 (Dip.: Bombyliidae) 慶良間諸島慶留間島のクロバネツリアブの記録

小浜継雄 (沖縄県宜野湾市)

クロバネツリアブ *Ligyra tantalus* (Fabricius, 1794) (ツリアブ科) は、日本、台湾、中国、韓国、マレーシア、タイ、インド、フィリピンなどに分布し、国内では本州、四国、九州、沖縄島、野甫島、宮古島、来間島、伊良部島、多良間島、石垣島、波照間島に分布する (東, 1987; 屋富祖, 2002; 三枝, 2008; 中村ら, 2014; 青木, 2015; 青木, 2016; 長田ら, 2018; 小浜・砂川, 2019)。

本種は、比較的大型で、翅と体が黒く、腹部背面に白い帯があり、よく目立つハエ目昆虫であるが、琉球列島における分布記録は意外に少ない。筆者は、慶良間諸島の慶留間島で本種を確認し、撮影しているので新分布記録として報告する。

##### [撮影データ]

1 ex., 沖縄県座間味村慶留間島, 2010年6月4日 (筆者撮影) (図1)

##### [引用文献]

青木一幸 (2015) クロバネツリアブの石垣島での記録. 琉球の昆虫, (39): 159.

青木一幸 (2016) クロバネツリアブの波照間島での記録. 琉球の昆虫, (40): 127.

東 清二 (1987) クロバネツリアブ. 東 清二 (編) 沖縄昆虫野外観察図鑑 第3巻: 147. 沖縄出版. 沖縄.

小浜継雄・砂川博秋 (2019) 宮古諸島におけるハエ目昆虫3種の分布記録. *Pulex*, (98): 800–801.

中村剛之・三枝豊平・諏訪正明 (2014) 双翅目. 日本昆虫学会日本昆虫目録編集委員会 (編) 日本昆虫目録第8巻. 1101 pp. 権歌書房. 福岡.

長田 勝・小浜継雄・松村雅史・野林千枝・山崎仁也 (2018) 沖縄諸島伊平屋島と野甫島で採集したクサカゲロウ・ハチ・アブ類. 琉球の昆虫, (42): 15–17.

三枝豊平 (2008) ツリアブ科. 平嶋義宏・森本 桂 (監) 新訂原色昆虫大圖鑑: 327–328. 北隆館. 東京.

屋富祖昌子 (2002) ハエ目. 東 清二 (監) 増補改訂 琉球列島産昆虫目録: 341–390. 沖縄生物学会. 沖縄.



図1. 慶留間島産クロバネツリアブ.

#### 5 4 8 (Col.: Anthribidae) 屋久島におけるホソセマルヒゲナガゾウムシの採集例

今田舜介 (九大院・生資環・昆虫)

ホソセマルヒゲナガゾウムシ *Caenophloeobius inconspicuus* (Wolfrum, 1948) は体長 4.5~6.0 mm のヒゲナガゾウムシ科甲虫である。本種はこれまでに九州 (鹿児島県栗野岳), 奄美大島, 中国

福建省,台湾から知られていた(森本,1984;Morimoto,1979).  
このたび,筆者は九州大学総合研究博物館において標本を整理する傍ら,屋久島で得られた本種の標本を見出したので,ここに報告する.

報告に先立ち,本報告の作成にあたりお世話になった丸山宗利博士,故森本桂博士に謝意を申し上げます.

[採集データ]

1♀,屋久島白谷,7.V.1972,入江平吉採集;1♂(図1),屋久島白谷,9.V.1972,入江平吉採集.

[引用文献]

Morimoto, K. (1979) The family Anthribidae of Japan (Coleoptera). Part 2. *Esakia*, (14): 1-23.

森本 桂 (1984) ヒゲナガゾウムシ科. 林 匡夫・木元新作・森本 桂 (編) 原色日本甲虫図鑑 IV:226-249. 保育社. 大阪.



図1. ホソセマルヒゲナガゾウムシ.

5 4 9 (Col.: Anthribidae) 奄美群島加計呂麻島におけるイトヒゲナガゾウムシの採集例

今田舜介 (九大院・生資環・昆虫)

筆者は本誌 98 号において,イトヒゲナガゾウムシ *Exillis japonicola* Nakane, 1963 の南西諸島における新産地を報告するとともに,その分布記録をまとめた(今田,2019).その後,新たに加計呂麻島(奄美群島)における採集例を見出したので,ここに報告する.

報告に先立ち,本報告の作成にあたりお世話になった丸山宗利博士,故森本桂博士に謝意を申し上げます.

[採集データ]

1♂,加計呂麻島瀬相,22.VI.1971,中條道夫採集・九州大学総合研究博物館保管.

[引用文献]

今田舜介 (2019) 南西諸島におけるイトヒゲナガゾウムシの新産地. *Pulex*, (98): 806-807.

5 5 0 (Col.: Anthribidae) 五島列島産ヒゲナガゾウムシ科目録

今田舜介 (九大院・生資環・昆虫)

五島列島のヒゲナガゾウムシ科甲虫については, Morimoto (1979), 江島ら (1981), 今坂ら (1994) により,9種が知られている.筆者は新たに五島列島初記録となるヒゲナガゾウムシ科甲虫を2種見出したので,既知種のリストと併せてここに報告する.

報告に先立ち,常日頃ご指導いただいている丸山宗利博士,貴重な標本を恵みいただいた青木淳一博士,妹尾俊男博士,ならびに,文献をご提供いただいた久末遊氏の皆様に謝意を申し上げます.

五島列島産ヒゲナガゾウムシ科目録

1. イボタロウヒゲナガゾウムシ *Anthribus niveovariegatus* (Roelofs, 1879): 中通島(今坂ら,1994).
2. スネアカヒゲナガゾウムシ *Autotropis distinguenda* (Sharp, 1891): 1 ex., 福江島, 21-22. IX. 2009,

青木淳一採集・筆者保管.

3. フタモンツツヒゲナガゾウムシ *Ozotomerus nigromaculatus* Morimoto, 1978 : 中通島 (今坂ら, 1994) .
4. キスジヒゲナガゾウムシ *Aphaulimia debilis* (Sharp, 1891) : 野崎島 (今坂ら, 1994) .
5. セマルヒゲナガゾウムシ *Phloeobius gibbosus* Roelofs, 1879 : 福江島 (江島ら, 1981 ; 今坂ら, 1994) .
6. シロモンオオヒゲナガゾウムシ *Mecotropis kyushuensis* (Nakane, 1963) : 中通島 (Morimoto, 1979 ; 今坂ら, 1994) .
7. チャマダラヒゲナガゾウムシ *Acorynus latirostris* (Sharp, 1891) : 中通島 (江島ら, 1981) .
8. キマダラヒゲナガゾウムシ *Tropideres naevulus* Faust, 1887 : 5 exs., 福江島, 21–22. IX. 2009, 青木淳一採集・筆者保管.
9. イトヒゲナガゾウムシ *Exillis japonicola* Nakane, 1963 : 福江島 (江島ら, 1981) .
10. アカアシヒゲナガゾウムシ *Araecerus tarsalis* Sharp, 1891 : 中通島 (江島ら, 1981) .
11. ハイマダラカギバラヒゲナガゾウムシ *Xanthoderopygus jocosus* (Sharp, 1891) : 中通島 (今坂ら, 1994) .

#### [引用文献]

- 江島正郎・古川雅通・後藤安一郎・市場和哉・今坂正一・池崎善博・岸田泰則・中山博彦・緒方一夫・志方比呂基・高橋篤美・浦田明夫・吉田喜美明 (1981) 五島列島産昆虫目録. 長崎県生物学会 (編) 五島の生物: 247–332. 長崎県生物学会. 長崎.
- 今坂正一・青木良夫・池崎善博・楠井善久・日下部良康・桃下 大・野田正美・田中 清・長崎北陽台高校生物部 (1994) 五島列島において 1982 年から 1994 年に新たに採集と報告された甲虫(2). 長崎県生物学会誌, (44): 77–94.
- Morimoto, K. (1979) The family Anthribidae of Japan (Coleoptera). Part 2. *Esakia*, (14): 1–23.

### 5 5 1 (Hym.: Chrysidae) 九州大学伊都キャンパスでタイリクセイボウを採集

小山誠太郎・阿部純大 (九大・農・昆虫) ・三田敏治 (九大院・農・昆虫)

タイリクセイボウ *Chrysis cavaleriei* (Buysson, 1908) は, セイボウ科ナミセイボウ属に属する 5~10 mm のハチである. 本種は九州本土では佐賀県でのみ確認されていたが (半田・三田, 2018), 福岡県に位置する九州大学伊都キャンパスでも生息が確認されたので報告する. 本記録に用いた標本は, 九州大学農学部昆虫学研究室および筆者の小山が保管している.



図1. タイリクセイボウ♀.

#### [採集データ]

1♂, 福岡県福岡市西区元岡九州大学伊都キャンパス, 24. VI. 2019, 小山誠太郎採集; 1♂, 同上, 28. VI. 2019, 阿部純大採集; 1♂1♀ (図1), 同上, 29. VI. 2019, 小山誠太郎採集; 1♂, 同上, 29. VI. 2019, 三田敏治採集; 1♂, 同上, 1. VII. 2019, 小山誠太郎採集; 1♀, 同上, 4. VII. 2019, 小山誠太郎採集; 1♀, 同上, 22. VII. 2019, 小山誠太郎採集.

今回採集した個体は、全て大学構内の農地付近で確認された。よく晴れた日中、ブルーシートの上や草花の茎上を本種が素早く動き回っている様子が観察された。同地ではツマムラサキセイボウ *Chrysis splendidula* Rossi, 1790 も見られた。

[引用文献]

半田宏伸・三田敏治 (2019) タイリクセイボウ *Chrysis cavaleriei* の本州，九州からの初記録。つねきばち，33: 33–34.

5 5 2 (Lep.: Autostichidae) 福岡県で採集されたミツボシキバガ科 2 種

外村俊輔 (九大院・生資環・昆虫)

ミツボシキバガ科 Autostichidae はキバガ上科に属し、前翅は翅頂がやや尖る楕円形で、地色は黄褐色や暗褐色、灰色等で中室付近に 3 個程度の黒斑と外縁に小黒点列を有することが主な特徴である。幼虫は枯葉や樹皮などの枯死植物体を食べることが知られる。旧北区・東洋区・オーストラリア区に分布し、国内からは 3 属 9 種が記録されている (上田, 2013; 西海, 2017; 神保, 2020)。筆者はこれまで福岡県から記録の無かった 2 種を採集したので報告する。標本はいずれも筆者が保管している。

キイロミツボシキバガ *Apethistis* sp. (図 1)

1♂2♀, 福岡県添田町英彦山, 18. VIII. 2020, LT. 筆者採集。

本州に分布し (奥, 2003; 上田, 2013; 間野, 2016), 九州からは初記録である。寄主は未知。本種の学名は未決定であり、今後の分類学的再検討を必要とする。

ヒマラヤスギミツボシキバガ *Autosticha kyotensis* (Matsumura, 1931) (図 2)

1♂, 福岡県福岡市南公園, 22. VI. 2019, 筆者採集。

本州・九州 (宮崎県) に分布する (Ueda, 1997; 岩崎・永井, 2020)。寄主はヒマラヤスギの枯葉やウメの枯枝の樹皮等が知られる (上田, 2013)。都市部の緑地で得られていることから、県内の低地に普遍的に分布すると考えられる。

末筆ながら、本稿を作成する上でご助言を頂いた上田達也博士 (地域環境計画) に厚く御礼申し上げます。

[引用文献]

岩崎郁雄・永井 庵 (2020) チョウ目 (ガ類)。岩崎郁雄 (編) 宮崎県昆虫目録: 241–319。宮崎県昆虫調査研究会。宮崎。

神保宇嗣 (2020) List-MJ 日本産蛾類総目録 [version 3]。http://listmj.mothprog.com/ (2020 年 12 月 2 日閲覧)。

間野隆裕 (2016) ミツボシキバガ科。豊田市生物調査報告書, 003–2 IX 昆虫, 17–18: 62。愛知。https://www.city.toyota.aichi.jp/kurashi/kankyou/sizen/1016111.html (2020 年 12 月 2 日閲覧)。

西海正彦 (2017) *Apethistis* 属 (ミツボシキバガ科) の日本未記録種。誘蛾燈, (227): 9–10。

奥 俊夫 (2003) 岩手県の小蛾類。158 pp. 岩手虫の会。岩手。

Ueda, T. (1997) A Revision of the Genus *Autosticha* Meyrick from Japan (Lepidoptera, Oecophoridae). *Japanese Journal of Entomology*, 65 (1): 108–126.

上田達也 (2013) ミツボシキバガ科。広渡俊哉・那須義次・坂巻祥孝・岸田泰則 (編) 日本産蛾



図1, 2. 1, キイロミツボシキバガ; 2, ヒマラヤスギミツボシキバガ.

### 5 5 3 (Hym.: Chrysoidea) 福岡県鷹巣山の灯火採集で得られたセイボウ上科 2 種

外村俊輔 (九大院・生資環・昆虫)

ハチ目は大部分が昼行性であるが、夜間の灯火にもアメバチ亜科等が誘引される(馬場・平嶋, 1991). 筆者は福岡県の英彦山に近傍の鷹巣山でガ類調査のために行った灯火採集(図1)にてセイボウ上科に属する短翅のハチ 2 種を得たので報告する. 標本は全て九州大学農学部昆虫学教室に保管されている.

#### アリモドキバチ科

クボミアリモドキバチ *Embolemus walkeri* Richards, 1951 (図2)

1♀, 福岡県添田町鷹巣山, 19. IX. 2020, alt. 785 m, LT. 筆者採集.

本種は本州・四国・九州に分布し(Olmi et al., 2014), 福岡県からは初記録と思われる. 本科のメスは一般的に著しい短翅であり, オスに比べて発見例は稀である. 本種のメスは土壌性のヒシウシカ類を寄主とすることが示唆されており, 寄主の生息環境である土壌中から見つかる場合が多い(寺山・須田, 2016; Mita & Olmi, 2018). また, アリの巣内や地表設置型の黄色水盤トラップ等からも偶発的に得られている(安松, 1954; 上森・三田, 2018). 筆者は 22 時頃に白幕にいた個体を発見し採集した. 本種は過去にも灯火採集で得られており(大生・三田, 2020), 灯火の設置地点付近に元々いた個体が光に誘引されて白幕に登ってきたと考えられる.

#### セイボウ科

ナナフシヤドリバチ *Nipponosega yamanei* Kurzenko & Lelej, 1994 (図3)

1♀, 福岡県添田町鷹巣山, 19. IX. 2020, alt. 785 m, LT. 筆者採集.

本種は本州・四国・九州に分布し, 福岡県では英彦山等から記録されている(久末・三田, 2019). 本属のメスは著しい短翅でナナフシ類の卵寄生蜂として知られ, 地表を徘徊しておりルッキング等で得られている(小松, 2016; 寺山・須田, 2016). 筆者は樹上に静止しているガ類を白幕に落とすために長竿を用いて樹冠を叩いていたところ, ニホントビナナフシ *Micadina phluctainoides* (Rehn, 1904) が得られたため白幕の支柱に留まらせていた. しばらく後に確認すると本種がナナフシの頭部付近を動き回っていた(図4). 卵寄生蜂では寄主の体表面に便乗して産卵後の卵に寄生する種が複数の科で知られる(Clausen, 1976)が, 本種が便乗していたかどうかは確認出来ておらず, ナナフシに由来する何らかの要素に誘引された可能性が考えられる.

末筆ながら, 採集に御同行頂いた屋宜禎央博士(九州大学), 奥尉平氏(九州大学), 上田恭

一郎博士（北九州市立自然史歴史博物館）及び佐々木公隆氏（九州産業高校），並びに本稿を投稿する上で御助言と文献を提供して頂いた三田敏治博士（九州大学）及び久末遊氏（九州大学）に厚く御礼申し上げる。

[引用文献]

- 馬場金太郎・平嶋義宏（編）（1991）昆虫採集学. 666 pp. 九州大学出版会. 福岡.
- Clausen, C. P. (1976) Phoresy among entomophagous insects. *Annual review of Entomology*, 21: 343–368.
- 久末 遊・三田敏治（2019）四国及び九州から見つかったナナフシヤドリバチ亜科 2 種の記録. つねきばち, (33): 36.
- 小松 貴（2016）長野県松本市におけるナナフシヤドリバチの記録. まつむし, (105): 64.
- Mita, T. & Olmi, M. (2018) Taxonomic additions of Embolemidae and Sclerogibbidae (Hymenoptera: Chrysoidea) from Japan, with description of a new species of *Trogloemblemus*. *Zootaxa*, 4497(4): 586–592.
- 大生唯統・三田敏治（2020）鳥取県扇ノ山におけるクボミアリモドキバチ雌の記録. ホシザキグリーン財団研究報告, (23): 148.
- Olmi, M., Mita, T. & Guglielmino, A. (2014) Revision of the Embolemidae of Japan (Hymenoptera: Chrysoidea), with description of a new genus and two new species. *Zootaxa*, 3793 (4): 423–440.
- 寺山 守・須田博久（編）（2016）日本産有剣ハチ類図鑑. 780 pp. 東海大学出版部. 神奈川.
- 上森教慈・三田敏治（2018）クボミアリモドキバチの宮崎県からの記録. *Pulex*, (97): 763.
- 安松京三（1954）アリモドキバチについて. *げんせい*, 3(1/2): 1–2.



図1-4. 1, 鷹巣山で行った灯火採集の様子; 2, クボミアリモドキバチ; 3, ナナフシヤドリバチ; 4, ニホントビナナフシの頭部周辺を動き回るナナフシヤドリバチ.

#### 5 5 4 (Hem.: Aphididae) 九州で初めて確認されたヤノハナフシアブラムシ

徳田 誠 (佐賀大・農) ・松本嘉幸 (千葉県八千代市)

ヤノハナフシアブラムシ *Nurudea yanoniella* (Matsumura) は、ヌルデの複葉の翼部にヌルデハベニサンゴフシと呼ばれるサンゴ状の虫えいを形成する (湯川・榊田, 1996; 松本, 2008)。筆者の一人、徳田は、2020年8月19日に佐賀県の多良岳中腹 (藤津郡太良町大字多良; 標高約 600 m) において、ヌルデハベニサンゴフシと見られる虫えいを確認した (図 1)。その後、9月27日に同地を訪れたところ、虫えいはすでに裂開しており、内部のアブラムシはほぼ全て脱出し終わった状態であった。筆者の一人、松本が、裂開後の虫えい内に残っていた有翅虫の死体からプレパラート標本を作成して形態を確認したところ、触角の模様や前翅の縁紋の特徴から、ヤノハナフシアブラムシであることを確認した。



図 1. 多良岳中腹 (藤津郡太良町大字多良) で確認されたヌルデハベニサンゴフシ (2020年8月19日; 徳田撮影)。

本種はこれまで、国内では本州からしか知られておらず (宮崎ら, 2016; 杉本, 2019), 九州からは初記録となるため、分布の基礎資料としてここに報告する。同定に用いたアブラムシの標本は松本が保管している。

なお、ヌルデは本種の一次寄主であり、虫えいから脱出した有翅虫は二次寄主に移動すると考えられている。二次寄主はコケ類であると言われているが、詳細は未解明である (湯川・榊田, 1996; 松本, 2008)。

#### [引用文献]

宮崎昌久・青木重幸・佐野正和 (2016) アブラムシ科. 日本昆虫目録編集委員会 (編) 日本昆虫目録 第4巻 準新翅類: 96–173. 日本昆虫学会. 福岡.

松本嘉幸 (2008) アブラムシ入門図鑑. 256 pp. 全国農村教育協会. 東京.

杉本俊一郎 (2019) 福岡県北部の大島 (宗像市) と藍島 (北九州市) のアブラムシ. *Rostria*, (63): 25–44.

湯川淳一・榊田 長 (1996) 日本原色虫えい図鑑. 826 pp. 全国農村教育協会. 東京.

#### 5 5 5 (Hym.: Pompilidae) ミイロツメボソクモバチの四国および九州からの記録

久末 遊・奥 尉平・外村俊輔・後藤聖士郎 (九大院・生資環・昆虫)

ミイロツメボソクモバチ *Agenioideus cincitellus* (Spinola, 1808) はクモバチ科に属する体長 5 mm ほどの狩りバチで (寺山・須田, 2016), 脚部と後体節の一部、ときに中体節の下部までが橙色になる美しい種である。壁や枯れ木の割れ目、他の有剣ハチ類が利用した穴やカタツムリの殻などに巣を作り (Oehlke & Wolf, 1987), 日本ではハエトリグモ科を狩ることが知られている (Shimizu & Wahis, 2009)。本種は日本では本州からのみ分布が確認されているが (Shimizu & Wahis, 2009; 中山, 2014; 川島ら, 2018; 清水ら, 2019; 渡辺, 2020), 筆者らは四国および九

州から採集しているためここに報告する。なお、報告に用いた標本は現在久末が保管しているが、愛媛県の個体を愛媛大学ミュージアムに、福岡県の個体を九州大学農学部昆虫学教室に保管予定である。

[採集標本データ]

1♀, 愛媛県松山市東野, 8. IX. 2016, 久末採集; 1♀, 同地, 26. VIII. 2017, 久末採集; 1♀ (図1), 福岡県田川郡添田町英彦山 (標高 660 m, 九州大学農学部附属彦山生物学実験施設), 30. VII. 2019, 久末採集; 1♀, 福岡県糟屋



図1. 福岡県産ミイロツメボソクモバチ.

郡宇美町四王寺山, 31. VII. 2020, 久末採集; 1♀, 同地同日, 外村採集; 1♀, 同地同日, 後藤採集.

愛媛県で2016年に得られた個体は、夜間、コンビニエンスストアの電灯に飛来していた。同じく愛媛県で2017年に得られた個体は、低山地の開けた草地を飛行していた。福岡県で2019年に得られた個体は、木造建築物の玄関付近を歩行していた。同じく福岡県で2020年に採集された個体は、土場に置かれた針葉樹の枯木付近を飛翔していた。本種は近年日本国内で分布を広げていることが示唆されているが(長瀬・清水, 2014), 原因は未だよく分かっていないようである。一部の国では移入種として扱われており(Buck, 2005), 本種の今後の動態に注目したい。

末筆ながら、英彦山における採集でお世話になった山口大輔氏(九州大学), 文献入手にあたりお世話になった前原 諭氏(栃木県)に厚く御礼申し上げます。

[引用文献]

- Buck, M. (2005) Two introduced spider wasps (Hymenoptera: Pompilidae) new to Canada, with notes on nesting habits and the incidence of introductions. *The Canadian Entomologist*, 137(3): 278–282.
- 川島逸郎・渡辺恭平・堀内慈恵・高梨沙織 (2018) 川崎市青少年科学館所蔵細腰亜目(昆虫綱: 膜翅(ハチ)目) 標本目録. 川崎市青少年科学館紀要, (28): 82–118.
- 長瀬博彦・清水 晃 (2014) 皇居の有剣類(セイボウ上科とアリ科を除く). 国立科学博物館専報, (50): 509–526.
- 中山恒友 (2014) 栃木県初記録となるミイロツメボソクモバチの記録. *インセクト*, 65(1): 109.
- Oehlke, J. & Wolf, H. (1987) Beiträge zur Insekten-Fauna der DDR: Hymenoptera — Pompilidae. *Beiträge zur Entomologie*, 37: 279–390.
- Shimizu, A. & Wahis, R. (2009) Systematic studies on the Pompilidae occurring in Japan: Genus *Agenioideus* Ashmead (Hymenoptera), supplement. *Entomological science*, 12(3): 238–251.
- 清水 晃・黒川秀吉・室田忠男・田埜 正 (2019) 福井県で採集したクモバチ. つねきばち, (34): 9–16.
- 寺山 守・須田博久 (編) (2016) 日本産有剣ハチ類図鑑. 780 pp. 東海大学出版部. 神奈川.
- 渡辺恭平 (2020) 2019年および2020年に神奈川県内で採集した昆虫の記録. 神奈川虫報, (203): 66–81.



## 5 5 6 (Col.: Scarabaeidae) ライトトラップ中に耳に侵入したアオドウガネ

細谷忠嗣 (九大・決断科学)

2009年のトカラ列島調査において、ライトトラップ中に耳に蛾が侵入して鼓膜に張り付いた事例を報告した(細谷, 2010)。その後、2016年のトカラ列島調査において、ライトトラップ中に耳にアオドウガネが侵入するという経験をし、当該個体を捕獲したのでここに報告する。

アオドウガネ奄美諸島亜種

*Anomala albopilosa gracilis* Schonfeldt, 1890

1 ex., 27.VII.2016, 鹿児島県十島村諏訪之瀬島榊戸原牧場, 筆者の右耳に侵入後に自力で脱出. 標本は筆者が保管(液浸標本). (図1)

本種は、国内では本州から琉球列島にかけて広く分布し、国外では台湾や朝鮮半島に分布する普通種であり、灯火によく飛来する(和田・栗原, 2012)。

2016年調査は筆者の単独で中之島と諏訪之瀬島の調査を実施した。7月29日の夜に諏訪之瀬島榊戸原牧場でHIDライトを使用したライトトラップ調査を行った。この年の諏訪之瀬島は特にアオドウガネの発生数が多く、ライトには多数のアオドウガネが飛来し、本事例の発生後には張っていた幕がアオドウガネの重みで落ちてしまうほどであった(図2)。筆者の体にも多数のアオドウガネが群がる状況であり、ライトトラップ調査を開始した約30分後の20時45分頃に、筆者の体に群がっていたアオドウガネのうちの1個体が右耳の穴に頭部を突っ込んで侵入を試み出した。すぐに手およびピンセットを用いて、除去を試みたが耳穴にすっぽりとはまっており、かつ脚で踏ん張っていたため、筆者による除去はできなかった。その後、その個体は鼓膜に到達する前に外耳道内で前方回転を行ない反転し、自力で耳穴の外に這い出てきた。本種の体型は筒型ではなく、背面が前後方向に強い丸みを持ち(図1)、狭い空間においても反転が可能であったと思われる。這い出てくるまでの約5分間、筆者は耳に痛みを感じ続け、反転時には強い圧迫感と特に強い痛みを苛まれた。また、鼓膜を破られるのではないかという強い恐怖感を覚えた。この個体が耳から出た後も、しばらくは耳内に違和感が残っていたが出血等はなかった。

このような耳穴内(外耳道)に昆虫が侵入する事例は毎年多数生じており、耳鼻咽喉科の疾患の事例としても多数報告されている(鳥山ら, 1961; 大川, 1979; 石川・尾股, 1998; 和田ら, 2003)。この中にはコガネムシ科甲虫の事例も多く見られ、大川(1979)によると昆虫類の中で甲虫目が鱗翅目に次いで症例が多く、そのうちの約半数がコガネムシ科であった。症例報告では種まで同定されていないコガネムシやカナブンといった記述も多いが、大川(1979)はオビマダ



図1. 諏訪之瀬島でのライトトラップ中に筆者の右耳に入ったアオドウガネ個体(左側面)。



図2. 誘引された個体の重みによって幕が落ちた後にライトトラップ下に集まる多数のアオドウガネ。

ソコガネ *Aphodius uniplagiatus* Waterhouse, ヒメビロウドコガネ *Maladera orientalis* (Motschulsky), ビロウドコガネ *M. japonica* (Motschulsky), オオビロウドコガネ *M. spissigrada* (Brenske) (= *M. renardi* (Ballion)), アカビロウドコガネ *M. castanea* (Arrow), カバイロビロウドコガネ *Serica similis* Lewis (= *Nipponoserica similis* (Lewis)), ナガチャコガネ *Heptophylla picea* Motschoulsky, チャイロコガネ属の 1 種 *Sericania* sp., ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky, セマダラコガネ *Blitopertha orientalis* (Waterhouse) (= *Exomala orientalis* (Waterhouse)) の 10 種について標本を確認して同定を行なっている。また、鳥山ら (1961) は学名を示していないがこの他にサクラコガネ (*Anomala daimiana* Harold) やナミコガネ (コガネムシ *Mimela splendens* (Gyllenhal)), クロコガネ (*Holotrichia kiotonensis* Brenske), スジコガネ (*Mimela testaceipes* Motschoulsky) (学名は和名に従い筆者が付記) といったより大型種も見られたとしているが、大川 (1979) の調査時には標本が虫に喰われて失われており確認ができず、確実な種同定ではない。

右耳に侵入した個体は本種としてはやや小型の個体 (体長 19.4 mm, 幅 10.1 mm, 体高 8.4 mm) であり、サクラコガネやスジコガネよりもやや大きく、ナミコガネ (コガネムシ) やクロコガネとほぼ同じ大きさであった。大川 (1979) はナミコガネ (コガネムシ) が成人の耳へぎりぎりに入るであろうと推測しており、アオドウガネは耳に入る最大サイズの甲虫の 1 つと考えられる。このような症例においては、昆虫が外耳道から出てこなくなるだけでなく、動き回ることによって昆虫の脚で外耳道や鼓膜を傷つけ、鼓膜穿孔を起した場合には外耳炎や中耳炎を併発することもある (大川, 1979)。本事例では、外耳道の入り口付近の比較的外耳道の径が大ききところでアオドウガネの個体が反転し、自ら出てきてくれたために事なきを得た。外耳道に詰まって取れなくなった場合には、島の唯一の医療機関である諏訪之瀬島診療所のお世話になることになるが、この診療所は医師の常駐がなく看護師のみであり、すぐに対応できなかった可能性もある。本事例後、筆者はライトトラップ調査時に耳の穴に丸めたティッシュを詰めて、昆虫類が外耳道内に侵入させない対策を行なっている。

最後に、細谷 (2010) においてクビシロノメイガ *Piletocera aegimiusalis* (Walker, 1859) の標本情報において、耳への侵入と耳からの取り出しの年が 2010 年となっているが 2009 年の誤りである。ここに誤記を訂正する。

#### [引用文献]

- 細谷忠嗣 (2010) ライトトラップ中に耳に侵入した蛾。 *Pulex*, (89): 555–556.
- 石川浩男・尾股丈夫 (1998) 外耳道異物 83 症例の検討。 *耳鼻咽喉科臨床*, 91: 899–904.
- 大川親雄 (1979) 耳鼻咽喉科領域の有生異物症。 *耳鼻咽喉科臨床*, 72: 1105–1175.
- 鳥山寧二・武田 亨・三枝直低・長倉政行・五島一吉 (1961) 武蔵野赤十字病院耳鼻咽喉科における 10 カ年の異物の統計的観察。 *日本耳鼻咽喉科学会会報*, 64: 1408–1421.
- 和田伊佐雄・加瀬康弘・飯沼壽孝 (2003) 外耳道異物の臨床統計的研究。 *日本耳鼻咽喉科学会会報*, 106: 678–684.
- 和田 薫・栗原 隆 (2012) スジコガネ亜科。岡島秀治・荒谷邦雄 (監) *日本産コガネムシ上科標準図鑑*: 326–360. 学研. 東京.

#### 5 5 7 (Hym.: Crabronidae) 宮崎県におけるナミアワフキバチの初記録

阿部純大 (九大・農・昆虫) ・河野太祐 (九大・博)

ナミアワフキバチ *Gorytes maculicornis* (Morawitz, 1889) は、日本では北海道、本州、九州で確認されており、九州では大分県から記録されている (寺山・須田, 2016; 河野・成田, 2017)。日本産アワフキバチ属の他種とは、メスでは複眼内縁が湾入し、尾域が密に点刻されること、オ

スでは頭楯が黄色であり、触角の下面が黒褐色ないし黄褐色であることなどから識別できる(寺山・須田, 2016)。河野・成田(2017)では「オスでは頭楯が黒であり」と記述されているが、これは誤りであり、オスの頭楯は黄色である。

筆者はこれまで分布記録がなかった宮崎県で本種を採集したので報告する。

[採集標本データ]

1♂(図1), 宮崎県西臼杵郡高千穂町五ヶ所, 25.VII.2020, 阿部採集・保管



図1. 宮崎県産ナミアワフキバチ♂.

末筆ながら本稿執筆と写真撮影にご助力いただいた久末遊氏(九州大学)に厚くお礼申し上げます。

[引用文献]

河野太祐・成田圭佑(2017)九州から初めて得られたナミアワフキバチ. *Pulex*, (96): 720.  
寺山 守・須田博久・高橋秀男・田塾 正・南部敏明(2016)ハナダカバチ亜科. 寺山 守・須田博久(編)日本産有剣ハチ類図鑑: 13-28. 東海大学出版部. 神奈川.

### 5 5 8 (Hym.: Crabronidae) 福岡県でキアシハナダカバチモドキを採集

阿部純大(九大・農・昆虫)

キアシハナダカバチモドキ *Stizus perrisi* (Dufour, 1838) (以下本種)は体長17~22mmの大型の狩りバチである。ハナダカバチモドキ属 *Stizus* は日本からは本種1種のみが確認されており、北海道、本州、四国、九州に生息している(寺山・須田, 2016)。九州内においては大分県(鳥潟, 1934)、鹿児島県(長瀬, 1982)での分布が報告されているが、筆者はこれまで記録がなかった福岡県において本種を採集したので報告する。なお、標本は全て筆者が採集・保管している。

[採集標本データ]

1♂, 福岡県福岡市西区今津, 17.VII.2020; 2♂, 福岡県福岡市西区今津, 19.VII.2020(図1)。

本種を発見してから8月上旬にかけて、不定期に計5回採集地を訪れたが、立入可能な範囲内では営巣場所を確認できなかった。また、採集地ではニッポンハナダカバチの生息が確認されており(村尾, 2015)、本種採集時も集団営巣が観察できた。

末筆ながら、本稿執筆と写真撮影に



図1. キアシハナダカバチモドキ♂.

ご助力いただいた久末遊氏（九州大学）に厚くお礼申し上げます。

[引用文献]

村尾竜起（2015）福岡県北西部の海浜における有剣ハチ類の記録. つねきばち, 27: 33–50.

長瀬博彦（1982）南九州の蜂-4-. 蜂友通信, (14): 57–78.

寺山守・須田博久・高橋秀男・田埜正・南部敏明（2016）キアシハナダカバチモドキ. 寺山守・須田博久（編）日本産有剣ハチ類図鑑: 23. 東海大学出版部. 神奈川.

鳥潟恒雄（1934）アカアシハナダカバチモドキ九州に産す. むし, 70(2): 123.

5 5 9 （Hym.: Tiphiidae）福岡県でツヤアリバチ *Methocha japonica* を採集

阿部純大（九大・農・昆虫）

ツヤアリバチ *Methocha japonica* (Yasumatsu, 1931) はコツチバチ科に属する小型のハチである. 性的二型が顕著であり, オスは有翅で体全体が黒色であるのに対し, メスは無翅で中体節が赤くなる. 本種は北海道, 本州, 九州に分布し (寺山・須田, 2016), 九州内では大分県 (鳥潟, 1933) での分布が報告されているが, 筆者はこれまで記録がなかった福岡県にて本種を採集しているので報告する.



図1. ツヤアリバチ♂.

[採集標本データ]

1♂ (図1), 福岡県福岡市西区桑原, 11. VI. 2019, 阿部採集・保管.

未筆ながら, 本稿執筆と写真撮影にご助力いただいた久末遊氏 (九州大学), 記録の確認の際にご助言していただいた成田圭佑氏 (茨城県) に厚くお礼申し上げます.

[引用文献]

寺山守・三田敏治 (2016) ツヤアリバチ. 寺山守・須田博久 (編) 日本産有剣ハチ類図鑑: 261–262. 東海大学出版部. 神奈川.

鳥潟恒雄 (1933) *Methoca japonica* Yasumatsu 九州に産す. むし, 6(2): 95.

5 6 0 (Hym.: Formicidae) 対馬から初めて確認されたインドオオズアリ *Pheidole indica*

First record of *Pheidole indica* from Tsushima Island

細石真吾 (九大熱研センター) ・山根正気 (鹿児島市)

インドオオズアリ *Pheidole indica* Mayr, 1879 は熱帯アジアが本来の生息域と考えられるが, 世界中で分布を拡大している外来アリであり (Sarnat et al., 2015 ; 山根・細石, 2020), 日本においては西南日本の攪乱地において見られる (寺山ら, 2014). 九州北部では福岡県, 佐賀県, 長崎県から知られており, 離島においては壱岐や五島列島から確認されていた (原田ら, 2017, 2019). 原田ら (2017, 2019) が実施した九州北部の港でのアリ調査によると, 博多港や壱岐の郷ノ浦港と芦辺港, 五島列島では中通島の奈良尾港と奈留島の奈留島港においてインドオオズアリを記録

しているが、対馬の厳原港と比田勝港からは記録されなかった。2018年と2019年における厳原港と比田勝港での筆者らの調査では本種は確認されなかったが、2020年における対馬の地方漁港における調査によって本種を確認したのでここに報告する。本種の発見は対馬において初記録となる。本報告に用いた細石採集の標本は全て九州大学熱帯農学研究センター（KUEC）に、山根採集の標本は北九州市立自然史・歴史博物館（SKYC）に保管されている。

[採集標本データ]

長崎県対馬市峰町志多賀（したか）, 19. IX. 2020: 4 soldiers, 11 workers, 細石採集; 1 soldier, 2 workers, 山根採集（チーズベイト）. [Japan: 4 soldiers and 11 workers, Tsushima Is. (Nagasaki-ken), Mine-machi, Shitaka port, 19.IX.2020, S. Hosoishi leg.; 1 soldier and 2 workers, Tsushima Is. (Nagasaki-ken), Mine-machi, Shitaka port, 19.IX.2020, Sk. Yamane leg., cheese baits]

長崎県対馬市豊玉町千尋藻（ちろも）, 19. IX. 2020: 7 workers, 細石採集; 1 soldier, 3

workers, 山根採集（チーズベイト）. [Japan: 7 workers, Tsushima Is. (Nagasaki-ken), Toyotama-machi, Chiromo port, 19.IX.2020, S. Hosoishi leg.; 1 soldier and 3 workers, Tsushima Is. (Nagasaki-ken), Toyotama-machi, Chiromo port, 19.IX.2020, Sk. Yamane leg., cheese baits]

長崎県対馬市峰町佐賀（さか）, 20. IX. 2020: 1 soldier, 4 workers, 1 queen, 細石採集（図1）; 4 workers, 山根採集（チーズベイト）. [Japan: 1 soldier, 4 workers and 1 queen, Tsushima Is. (Nagasaki-ken), Mine-machi, Saka port, 20.IX.2020, S. Hosoishi leg.; 4 workers, Tsushima Is. (Nagasaki-ken), Mine-machi, Saka port, 20.IX.2020, Sk. Yamane leg., cheese baits]



図1. インドオオズアリ有翅女王.

港内（図2）に点在する草地や漁具が置かれている場所において、粉チーズを用いたベイトに誘引された働きアリが採集された。佐賀港では有翅女王も確認しており、本種が定着して繁殖活動を行っていると思われる。これらの漁港は対馬北部東岸に位置し、フェリーなどの発着がない地方漁港であるが、いくつかは韓国と木材の交易があるという。今後は厳原港や比田勝港のような大きな港だけではなく、外国と交易がある地方の港も外来アリのモニタリング対象に含めることが望ましいと思われる。



図2. インドオオズアリが採集された佐賀港.

[引用文献]

原田豊・藤田祥帆・田神沙羅（2017）九州北部の港のアリ—外来アリのモニタリング—. 日本生物地理学会会報, 71: 39–46.

原田豊・浅井嘉乃・荒場麻瑚・日笠山円来・齋藤七彩（2019）五島列島の港のアリ相—外来アリ

のモニタリング。Nature of Kagoshima, 46: 27–32.

Sarnat, E. M., Fischer, G., Guenard, B. & Economo, E. (2015) Introduced *Pheidole* of the world: taxonomy, biology and distribution. *ZooKeys*, 543: 1–109.

寺山守・久保田敏・江口克之 (2014) 日本産アリ類図鑑. 278 pp. 朝倉書店. 東京.

山根正気・細石真吾 (2020) 日本産オオズアリ属の女王形質による分類. 昆虫 (ニューシリーズ), 23 (2): 37–53.

#### 5 6 1 (Hym.: Pompilidae) 福岡県篠栗町にて外来クモバチ *Lissocnemis brevipennis* を採集 上森教慈 (九大院・生資・流域)

*Lissocnemis brevipennis* (Cameron, 1902) は, Matsumoto et al. (2018) によって初めて日本 (大阪府, 兵庫県, 岡山県) から記録され, 外来種と考えられている. その後, 福岡県 (廣瀬ら, 2019) や愛知県 (大草, 2019) から記録されている.

今回筆者は, 九州大学農学部附属福岡演習林にて本種を採集したので報告する. 福岡県ではすでに記録されているが, 確認されて間もないこと, 侵入経路や寄主が明らかでないこと (廣瀬ら, 2019) から, 本県における追加記録として報告する. 本個体は演習林庁舎の玄関で死んでいたため, 生態情報は得られていない.



図 1. *Lissocnemis brevipennis* ♂.

文末ながら, 調査許可をいただいた演習林職員の皆様に厚く御礼申し上げます. なお, 本研究の一部は日本科学協会の笹川科学研究助成 2020-5024 による助成を受けたものである.

#### [採集標本データ]

1♂ (図 1), 福岡県粕屋郡篠栗町九州大学農学部附属福岡演習林, 6. VIII. 2020, 筆者採集・保管.

#### [引用文献]

廣瀬朋輝・久末 遊 (2019) 外来クモバチ *Lissocnemis brevipennis* を福岡県で採集. 月刊むし, 586: 27–28.

Matsumoto, R., Miyake, H., Yamazaki, K., Aono, T. & Shimizu, A. (2018) Discovery of a New, Adventive, Spider Wasp, *Lissocnemis brevipennis*, in Japan (Hymenoptera: Pompilidae: Ctenocerinae). *Japanese Journal of Systematic Entomology*, 24 (1): 95–98.

大草伸治 (2019) 愛知県未記録の外来クモバチ. つねきばち, 34: 24.

#### 5 6 2 (Hym.: Chrysididae) 宮崎県・福岡県におけるナナフシヤドリバチの記録 上森教慈 (九大院・生資・流域) ・三田敏治 (九大・農・昆虫)

ナナフシヤドリバチ *Nipponosega yamanei* Kurzenko & Lelej, 1994 はセイボウ科ナナフシヤドリバチ亜科に属するハチで, ナナフシ類の卵寄生蜂である (寺山・須田, 2016). 九州では近年, 本種が福岡県および長崎県対馬から記録されている (久末・三田, 2019).

筆者のうち上森は, 宮崎大学農学部附属田野フィールド (演習林) にて宮崎県初記録となる個体を, 九州大学農学部附属福岡演習林にて福岡県の追加記録となる個体を採集したので報告す

る。どちらも照葉樹林内の林床に設置したイエローパントラップにて得られた。標本は九州大学農学部昆虫学研究室に保管されている。

文末ながら、田野フィールドでの調査許可および調査地の選定にご協力いただいた宮崎大学の高木正博博士、福岡演習林での調査許可をいただいた九州大学農学部附属福岡演習林職員の皆様、田野フィールドでの調査に同行いただいた九州大学農学部流域環境制御学研究室の菱拓雄博士に厚く御礼申し上げます。また、本研究の一部は日本科学協会の笹川科学研究助成 2020-5024 による助成を受けたものである。

#### [採集標本データ]

1♀, 宮崎県宮崎市田野町乙 宮崎大学農学部附属田野フィールド, alt. 177m, 23–25. VII. 2018, 上森採集 (YPT) ; 1♀, 福岡県粕屋郡篠栗町津波黒 九州大学農学部附属福岡演習林, alt. 48m, 2–4. IX. 2020, 上森採集 (YPT) .

#### [引用文献]

久末 遊・三田敏治 (2019) 四国及び九州から見つかったナナフシヤドリバチ亜科 2 種の記録。つねきばち, 33: 36.  
寺山 守・須田博久 (編) (2016) 日本産有剣ハチ類図鑑. 780 pp. 東海大学出版部. 神奈川.

### 5 6 3 (Col.: Scarabaeoidea) 九州大学伊都キャンパスにおける食糞性コガネムシ相調査

牧野迪彦 (九大院・生資環・昆虫) ・紙谷聡志 (九大院・生資環・昆虫)

福岡市西区に位置する九州大学伊都キャンパスは、イノシシ、アナグマ、タヌキなど 24 種の哺乳類が確認されている (九州大学, 2017) . 一方、キャンパス移転前の昆虫相については、食糞性コガネムシが 5 種記録されている (野村・紙谷 2013) : センチコガネ *Phelotrupes laevistriatus* (Motschulsky, 1857), コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* Waterhouse, 1875, ツヤエンマコガネ *Parascatonomus nitidus* (Waterhouse, 1875), マメダルマコガネ *Panelus parvulus* (Waterhouse, 1874), クロツツマグソコガネ *Saprosites japonicus* Waterhouse, 1875. しかし、伊都キャンパス完成後の食糞性コガネムシ相の調査は行われていない。そこで、今回は 2019 年に著者らが行った調査結果を報告する。

#### 材料・方法

2019 年 5 月から 11 月まで毎月、伊都キャンパスの 8~11 ヶ所において牛糞、ブタ糞をベイトとしたノムラホイホイ型トラップを各 5 個設置した。設置から 5 日後に回収し、各トラップで採集された糞虫の種、個体数を記録した。

#### 結果

3 科 4 属 5 種 1,370 個体が確認された。

#### Geotrupidae センチコガネ科

1. *Phelotrupes laevistriatus* (Motschulsky, 1857) センチコガネ (図 1)  
102♂171♀, 19–25. V. 2019; 3♂39♀, 17–23. VI. 2019; 4♀, 23–29. VII. 2019; 9♂1♀, 23–30. VIII. 2019; 129♂52♀, 23–29. IX. 2019; 153♂137♀, 21–27. X. 2019; 18♂5♀, 18–24. XI. 2019.

#### Scarabaeidae コガネムシ科

2. *Onthophagus ater* Waterhouse, 1875 クロマルエンマコガネ (図 2)

- 57♂56♀, 19–25. V. 2019; 13♂34♀, 17–23. VI. 2019; 2♂2♀, 23–29. VII. 2019; 2♀, 23–30. VIII. 2019; 1♂6♀, 23–29. IX. 2019; 38♂25♀, 21–27. X. 2019; 2♂5♀, 18–24. XI. 2019.
3. *Onthophagus atripennis* Waterhouse, 1875 コブマルエンマコガネ (図 3)  
21♂24♀, 19–25. V. 2019; 18♂28♀, 17–23. VI. 2019; 22♂34♀, 23–29. VII. 2019; 13♂16♀, 23–30. VIII. 2019; 32♂30♀, 23–29. IX. 2019; 4♂9♀, 21–27. X. 2019.
4. *Parascatonomus nitidus* (Waterhouse, 1875) ツヤエンマコガネ (図 4)  
1 ex., 19–25. V. 2019; 15 exs., 17–23. VI. 2019; 2 exs., 23–29. VII. 2019; 31 exs., 23–30. VIII. 2019; 1 ex., 23–29. IX. 2019; 1 ex., 21–27. X. 2019.

#### Trogidae コブスジコガネ科

5. *Glyptotrox opacotuberculatus* (Motschulsky, 1860) ヒメコブスジコガネ (図 5)  
1 ex., 19–25. V. 2019; 1 ex., 17–23. VI. 2019.

本調査によって、新たにクロマルエンマコガネとヒメコブスジコガネの 2 種が確認されたことにより、九州大学伊都キャンパスにおける食糞性コガネムシの種数は 7 種となった。

今回の調査で新たに記録された 2 種は、いずれも福岡県の低地に広く分布する種であることから (城戸 2018), 野村・紙谷 (2013) による調査時には分布していたものと考えられる。しかし、調査に用いられたベイト (すしのこ・蛹粉) に誘引されず、採集できなかったのではないかと推測される。

#### 謝辞

本研究を進めるにあたり、有満牧場、有限会社浦ファーム、有限会社三苦牧場にはブタ、牛糞の採取、提供にご協力いただいた。心より感謝申し上げます。九州大学天敵昆虫学研究室の楠原弘己氏には、調査にご助力いただいた。深く御礼申し上げます。

#### [引用文献]

- 城戸克弥 (2018) 福岡県のコガネムシ上科. KORASANA, (88): 57–124.  
九州大学 (2017) 九州大学統合移転事業環境監視調査 平成 28 年度 総合報告書.  
<http://suisin.jimu.kyushu-u.ac.jp/archive/examresult/wgreport/pdf/mon/h28all.pdf>  
野村周平・紙谷聡志 (2013) 1994–1995 年に九州大学伊都キャンパス建設予定地において確認された昆虫目録. 比較社会文化 九州大学大学院比較社会文化学府紀要, 19: 85–112.



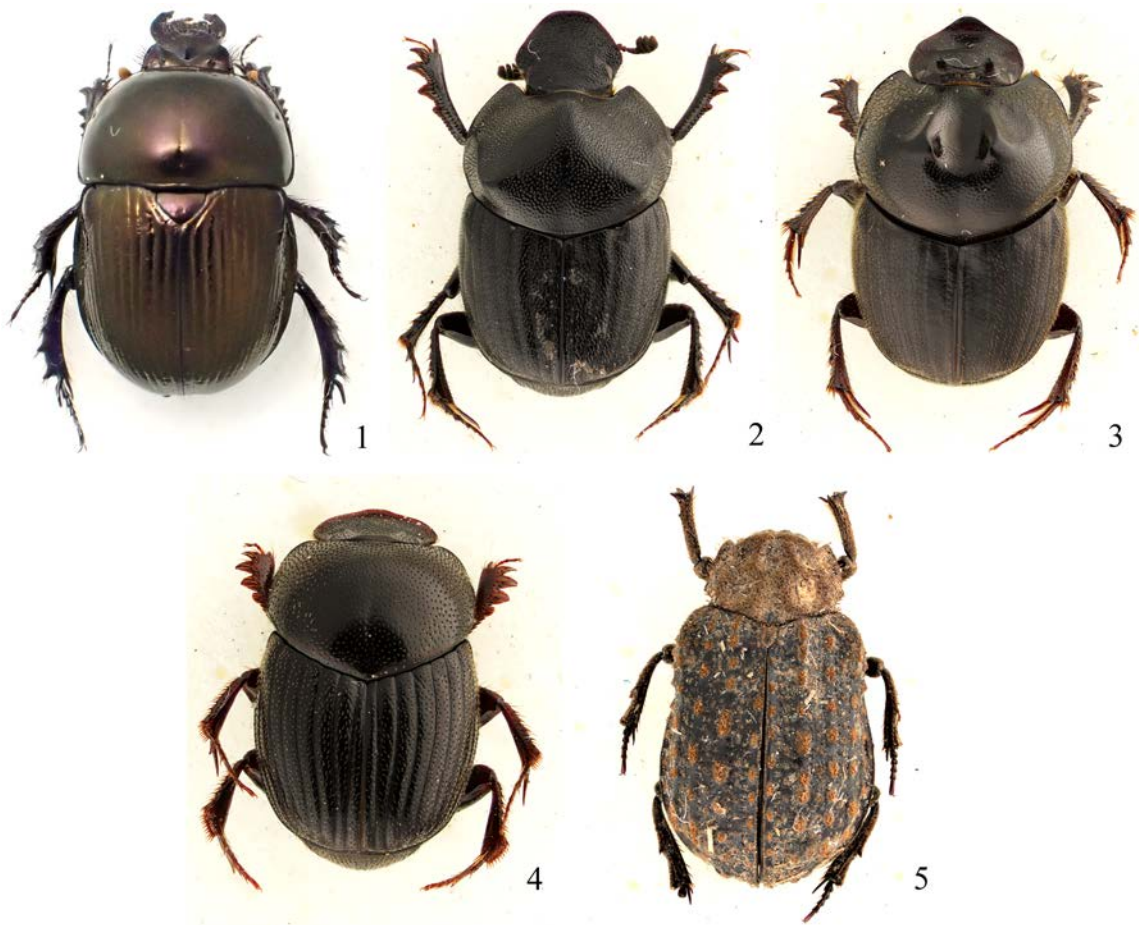


図1-5. 1, センチコガネ; 2, クロマルエンマコガネ; 3, コブマルエンマコガネ; 4, ツヤエンマコガネ; 5, ヒメコブスジコガネ.

#### 5 6 4 (Col.: Tenebrionidae) 対馬におけるニセマグソコガネダマシの記録

橋爪拓斗 (九大・農・昆虫)

ニセマグソコガネダマシ *Trachyscelis sabuleti* Lewis, 1894 は、体長約 3 mm の海浜性のゴミムシダマシで日本では本州、九州、五島列島、天草諸島に分布する (秋田・益本, 2016) . 本種の国内分布は亀澤・小野 (2020) により詳しく解説されているが、対馬からの記録は見当たらない. 筆者は長崎県対馬で採集しているので報告する.

[採集標本データ]

2 exs. (図 1), 長崎県対馬市上対馬町琴, 11. V. 2019, 筆者採集・保管.

末筆ながら本稿をご確認いただいた辻尚道氏に厚く御礼申し上げます.

[引用文献]



図 1. ニセマグソコガネダマシ.

秋田勝己・益本仁雄 (2016) 日本産ゴミムシダマシ大図鑑. 302 pp. むし社. 東京.

亀澤 洋・小野広樹 (2020) ニセマグソコガネダマシ (ゴミムシダマシ科, キノコゴミムシダマシ亜科, ニセマグソコガネダマシ族) の国内分布. さやばねニューシリーズ, (39): 17-19.

### 5 6 5 (Col.: Anamorphidae) 宮崎県におけるヒメマルガタテントウダマシの記録

橋爪拓斗 (九大・農・昆虫)

ヒメマルガタテントウダマシ *Dexialia minor* (Chûjô, 1941) は体長約 1.5 mm のマルテントウムシダマシ科の甲虫である. 宮崎県昆虫目録に記録はなく (木野田・岩崎, 2020), 宮崎県からの分布記録として, 筆者の採集した個体をここに報告する.

#### [採集標本データ]

1 ex. (図 1), 宮崎県高千穂町五ヶ所, 25. VII. 2020, 筆者採集・保管.

枯れた竹類のビーティングで得られた.

末筆ながら本種を同定して頂いた生川展行氏, 写真撮影にご協力いただいた野崎翼氏, 本稿をご確認いただいた辻尚道氏に厚く御礼申し上げます.

#### [引用文献]

木野田毅・岩崎郁雄 (2020) コウチュウ目. 今坂正一 (監)・岩崎郁雄 (編) 宮崎県昆虫目録: 94-208. クラインヴィッセン. 宮崎.



図 1. ヒメマルガタテントウダマシ.

### 5 6 6 (Col.: Scarabaeidae) 福岡県におけるヤエヤマニセツツマグソコガネの記録

橋爪拓斗 (九大・農・昆虫)

ヤエヤマニセツツマグソコガネ *Ataenius picinus* Harold, 1867 は体長約 5 mm のマグソコネ亜科に属するコガネムシで, 日本では本州 (岐阜県), 九州 (長崎県, 宮崎県), 南西諸島からの記録が知られる (金子・重藤, 2019). 筆者は福岡県産の標本を所持しているので報告する.

#### [採集標本データ]

1 ex. (図 1), 福岡県福岡市西区桑原九州大学伊都キャンパス, 16. VI. 2020, 中馬・橋爪採集・保管.

ライトトラップで得られた.

末筆ながら本種を発見してくださった中馬章吾氏, 分布情報をご教示くださった柿添翔太郎博士, 本稿をご確認いただいた辻尚道氏に厚く御礼申し上げます.

#### [引用文献]

金子直樹・重藤裕彬 (2019) 鹿児島県与論島からのコガネムシ科 3 種の記録. さやばねニューシリーズ, (36): 66-68.



図 1. ヤエヤマニセツツマグソコガネ.

### 567 (Tri.: Limnephilidae) 九州におけるヤマトビイロトビケラの記録

橋爪拓斗 (九大・農・昆虫)

ヤマトビイロトビケラ *Nothopsyche montivaga* Nozaki, 1999 は幼虫が水生のものが多くトビケラの中では珍しく、幼虫が陸上で生活するトビケラである (Nozaki, 1999) . 現在までに、本州 (岡山県・島根県) , 四国 (愛媛県) , 九州 (福岡県・長崎県・熊本県) から分布が確認されている (Nozaki, 1999 ; 森ら, 2006 ; 小松・服部, 2020) . 九州では Nozaki (1999) による福岡県の添田町英彦山と篠栗町若杉山, 熊本県南小国町の記録, 司村・今坂 (2020) の福岡県釈迦岳と小松・服部 (2020) による長崎県島原半島の記録が知られている. 筆者は福岡県糸島市で本種の幼虫を採集し, 大分県別府市で幼虫の巣を採集しているので報告する. 大分県と脊振山地からは初記録になるとと思われる.

#### [採集標本データ]

2 exs. (larvae), 福岡県糸島市瑞梅寺, 6. IV. 2020, 筆者採集・保管 (図 1) .  
1 ex. (case), 大分県別府市東山, 19. IX. 2020, 筆者採集・保管.

糸島市では井原山の水無登山口付近の道路沿いの土を篩ったところ幼虫が得られた. 別府市では由布岳の石が多い林床で得られた.

末筆ながら同定, 文献の入手にあたりお世話になった野崎隆夫博士, 本稿をご確認いただいた辻尚道氏に厚く御礼申し上げます.



図 1. ヤマトビイロトビケラ幼虫.

#### [引用文献]

- 小松 貴・服部 充 (2020) 長崎県島原半島にて確認された陸生トビケラ *Nothopsyche montivaga*. 昆虫 (ニューシリーズ) , 23(4): 143–144.
- 森 生枝・十川巡一・十川和幸 (2006) 岡山県で陸生種ヤマトビイロトビケラ (トビケラ目, エグリトビケラ科) を確認. 岡山県自然保護センター研究報告, 14: 71–74.
- Nozaki, T. (1999) A new terrestrial caddisfly, *Nothopsyche montivaga* n. sp., from Japan (Trichoptera: Limnephilidae). In Malicky, H. & P. Chantaramongkol (eds.) *Proceedings of the 9th International Symposium on Trichoptera*: 299–309, University of Chiang Mai, Chiang Mai.
- 司村宜祥・今坂正一 (2020) 2018 年に福岡県釈迦岳等で採集した水生昆虫類. KORASANA, 93: 9–17.

### 568 (Col.: Zopheridae) 石垣島におけるトカラトゲヒメヒラタホソカタムシの記録

橋爪拓斗 (九大・農・昆虫)

トカラトゲヒメヒラタホソカタムシ *Colobicus tokarensis* Okada, 2005 (以下, 本種) はコブゴミムシダマシ科に属する小型の甲虫である. 本種は近縁種のトゲヒメヒラタホソカタムシ *C. sakaii* とは主に前胸背板や触角の形態により識別される (Okada, 2005 ; 青木, 2012) . 本種はこれまでにトカラ列島 (Okada, 2005) , 沖縄島 (青木, 2012) , 西表島 (杉本, 2020) から記録がある.

筆者は石垣島にて本種を採集したので、同島からの分布記録としてここに報告する。

[採集標本データ]

1 ex. (図1), 沖縄県石垣市桃里, 26. III. 2019, 筆者採集・保管。

末筆ながら、本種の同定をしてくださり、分布情報を教えてくださった中野文尊氏、藤川浩明氏、本稿をご確認いただいた辻尚道氏に厚く御礼申し上げる。

[引用文献]

青木淳一 (2012) 日本産ホソカタムシ類図説。ムキヒゲホソカタムシ科・コブゴミムシダマシ科。ix+94 pp. 昆虫文献 六本脚。東京。

Okada, K. (2005) Occurrence of the genus *Colobicones* Grouvelle (Coleoptera, Zopheridae, Colydiinae) in Japan, with description of two new species. *Elytra, Tokyo*, 33: 425–431.

杉本可能 (2020) 西表島のトカラトゲヒメヒラタホソカタムシの記録。月刊むし, (594): 55.



図1. トカラトゲヒメヒラタホソカタムシ。

5 6 9 (Col.: Curculionidae) 沖縄島のヤサイゾウムシの記録

小浜継雄 (沖縄県宜野湾市) ・長田 勝 (沖縄県宜野湾市)

ヤサイゾウムシ *Listroderes costirostris* Schoenherr, 1826 は、ブラジル原産の野菜類の害虫で、国内では1942年に岡山で発見され、その後、北海道を除く日本各地に広がった (森本, 1988)。沖縄県内において、本種は北大東島と南大東島、与那国島から記録されている (東平地, 1960, 1964; 東, 1989; 東・金城, 1989; 佐々木ら, 2002)。筆者らは、沖縄島で本種を採集しているので、分布資料として報告する。

[採集標本データ]

1 ex., 沖縄県恩納村安富祖県民の森, 26. XI. 2011, 長田 勝採集・琉球大学博物館 (風樹館) 収蔵 (登録番号: RUMF-ZI-18083) (図1)

本個体は灯火採集で得られた。

末文ながら、本種を同定していただいた、故森本桂先生に感謝申し上げます。そして、発表が遅れたことをお詫び申し上げます。



図1. 沖縄島産ヤサイゾウムシ。

[引用文献]

東 清二 (1989) 南大東島の昆虫相に関する若干の考察。沖縄農業, 24(1-2): 27-39.

東 清二・金城正勝 (1989) 与那国島の昆虫相。ヨナグニサンを守る会 (編) ヨナグニサン保護増殖検証事業報告書: 25-56. ヨナグニサンを守る会。沖縄。

東平地清二 (1960) 南北大東島に野菜の新害虫ヤサイゾウムシ発生. 琉球植物防疫情報, (2): 5.  
東平地清二 (1964) 南大東島のヤサイゾウムシについて. 琉球植物防疫情報, (18): 71-72.  
森本 桂 (1988) 日本へ侵入したゾウムシ類の見分け方と被害. 農薬研究, (137): 28-44.  
佐々木健志・木村正明・河村 太 (2002) コウチュウ目 (鞘翅目). 東 清二 (監) 増補改訂琉球列島産昆虫目録: 157-284. 沖縄生物学会. 西原.

### 570 (Col.: Chrysomelidae) 八重山諸島黒島におけるサツマイモにつくハムシ3種の記録 小浜継雄 (沖縄県宜野湾市)

筆者は、2014年2月に八重山諸島黒島において、サツマイモ害虫の調査を行った結果、オキナワイモサルハムシ、タテスジヒメジンガサハムシおよびヨツモンカメノコハムシの生息を確認しているため、分布資料として報告する。

#### 1. オキナワイモサルハムシ *Colasposoma auripenne* (Motschulsky, 1860)

[目撃データ] 4 exs., 21. II. 2014, 竹富町黒島保里。

黒島から初記録と思われる。

体背面の色には茶色、赤銅色および緑青色の3型があり (木元・滝沢, 1994; 小濱, 2010), 今回確認した4頭のうち、3頭は茶色型、1頭は緑青色型であった。

国内では、屋久島、口之島、中之島、悪石島、宝島、奄美大島、喜界島、沖永良部島、沖縄島、津堅島、阿嘉島、慶留間島、久米島、宮古島、伊良部島、多良間島、石垣島、西表島、波照間島、与那国島に分布する (木元・滝沢, 1994; 佐々木ら, 2002; 滝沢, 2009; 小濱, 2010)。

#### 2. タテスジヒメジンガサハムシ *Cassida circumdata* Herbst, 1799

[目撃データ] 3 exs., 21. II. 2014, 竹富町黒島保里。

黒島から初記録と思われる。

国内では、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美大島、沖永良部島、沖縄島、伊平屋島、津堅島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島、尖閣諸島、小笠原 (硫黄島) に分布する (木元・滝沢, 1994; 佐々木ら, 2002; 小濱, 2010; 滝沢, 2014)。

#### 3. ヨツモンカメノコハムシ *Lacoptera nepalensis* Boheman, 1855

[目撃データ] 1 ex., 21. II. 2014, 竹富町黒島保里。

黒島から重藤ら (2020) が記録している。

国内では、本州、四国、九州および琉球列島の多くの島々に分布する。本種は従来、沖縄島以南に分布するとされていたが、近年、九州や四国、本州にその分布域を広げている (木元・滝沢, 1994; 滝沢, 2014; 重藤ら, 2020)。

上記3種は、いずれも保里にあった、ごく小さなサツマイモ畑で確認された。

#### [引用文献]

木元新作・滝沢春雄 (1994) 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 539 pp. 東海大学出版会. 東京.

小浜継雄 (2010) 沖縄県におけるサツマイモの食葉性害虫. 沖縄県農業研究センター研究報告, (4): 27-31.

佐々木健志・木村正明・河村 太 (2002) コウチュウ目 (鞘翅目). 東 清二 (監) 増補改訂琉球列島産昆虫目録: 157-284. 沖縄生物学会. 西原.

重藤裕彬・末永晴輝・南 雅之・渡辺晃平 (2020) ヨツモンカメノコハムシの分布記録および日

本国内、特に琉球列島における分布の現状. ホシザキグリーン財団研究報告, (23): 227–243.  
滝沢春雄 (2009) 日本産ハムシ科生態覚書(4). 神奈川虫報, (168): 1–11.  
滝沢春雄 (2014) 日本産ハムシ科生態覚書(8). 神奈川虫報, (182): 37–46.

#### 5 7 1 (Hym.: Formicidae) ツヤオオズアリを長崎県から確認

久末 遊 (九大院・生資環・昆虫) ・伊藤誠人 (環境機器(株))

ツヤオオズアリ *Pheidole megacephala* (Fabricius, 1793) は体長 2~3 mm の小型のアリで、小型働きアリの中胸傾斜面に小隆起がないこと、大型働きアリの頭部背面後方が広範囲に平滑で光沢があることから日本産の同属他種とは容易に識別できる (寺山ら, 2014) . 本種はアフリカが原産地の放浪種で、主に物資の運搬に伴って現在では世界中の熱帯・亜熱帯に移入されており、侵入地では非常に高い侵略性が指摘されている (Wetterer, 2012 ; IUCN, 2013 ; Sarnat et al., 2015 ; Fournier et al., 2019) .

日本では主に南西諸島 (Sonobe, 1973 ; 山根ら, 1999) と小笠原諸島 (寺山・森, 2014) において定着が確認されており、特に南大東島では最優占種となっている (大西ら, 2011 ; 諏訪部ら, 2016) . 近年本土部からの報告が相次いでおり、筆者らが確認できる限り東京都 (Sakamoto et al., 2016) , 兵庫県 (村上, 2019) , 宮崎県 (岩崎・山根, 2020) , 鹿児島県 (久末, 2019 ; 山根ら, 2019) から見つかった。本年、筆者の一人である伊藤の手元に長崎県より採集された本種が検体として送られてきた。上記の通り本種は北部九州から未記録と思われるためここに報告する。なお、報告に用いた標本は九州大学農学部昆虫学教室に保管している。

[採集標本データ]

1 soldier (図 1) , 1 worker, 長崎県長崎市万才町, 14. IX. 2020.

上記の個体についてはビル 2 階空き事務所の窓際から採集されており、窓からの侵入が疑われる。なお、採集現場については駆除業者による駆除が行われたが、屋外については駆除されていない。したがって、付近にはまだ生息している可能性が高く、今後より詳細な調査が望まれる。

長崎県には大小合わせて 73 もの有人島が存在し、長崎市内からは島嶼部を含め県内外各地へ物資が運搬されている (長崎県, 2020) . 本種が島嶼部へ侵入した際の在来生態系への影響は強く (LaPolla et al., 2000 ; 大西ら, 2011 ; Uchida et al., 2016) , 本種が侵入・定着した場合のリスクも含めて今後のモニタリングが必要である。

末筆ながら、山根正気博士 (鹿児島県) には貴重な文献をご恵与いただいた。厚く御礼申し上げます。

[引用文献]

Fournier, A., Penone, C., Pennino, M. G. & Courchamp, F. (2019) Predicting future invaders and future invasions. *PNAS*, 116(16): 7905–7910.



図 1. ツヤオオズアリの大型ワーカー。

- 久末 遊 (2019) 九州本土から初めて確認されたツヤオオズアリ *Pheidole megacephala*. *Pulex*, (98): 786–788.
- IUCN ISSG (2013) International Union for the Conservation of Nature Invasive Species Specialist Group: 100 of the world's worst alien invasive species. <http://www.issg.org/database/species/search.asp?st=100ss>. 2020年10月12日アクセス.
- 岩崎郁雄・山根正気 (2020) 宮崎県におけるツヤオオズアリの発見と屋内侵入の記録. *Insecta Miyazaki*, (8): 73–74.
- LaPolla, J. S., Otte, D. & Sperman, L. A. (2000) Assessment of the effects of ants on Hawaiian crickets. *Journal of Orthoptera Research*, 9(9):139–148.
- 村上協三 (2019) ハエトリグモと外来アリ. *宝塚の自然*, (33): 7–8.
- 長崎県 (2020) 第66版 (令和元年) 長崎県統計年鑑. <https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/kenseijoho/toukeijoho/kankoubutsu/nenkan/439035.html> 2020年12月3日アクセス.
- 大西一志・諏訪部真友子・田中宏卓・儀間朝宣・松井 晋 (2011) 海洋島における外来アリの分布パターンの経時変化と在来鳥類群集への影響評価. *プロ・ナトウーラ・ファン* 第20期助成成果報告書: 105–110.
- Sarnat, E.M., Fischer, G., Guénard, B. & Economo, E. (2015) Introduced *Pheidole* of the world: taxonomy, biology and distribution. *Zookeys*, 543: 1–109.
- Sakamoto, Y., Mori, H., Imai, H., Kishimoto, T., Toda, M., Kishi, S. & Goka, K. (2016) Surveys of the ant faunas at ports of Tokyo Bay and the Ogasawara Islands. *Applied Entomology and Zoology*, 51(4): 661–667.
- Sonobe, R. (1973) Ant fauna of the Sesoko island, Okinawa. *Sesoko Marine Science Laboratory Technical Report*, 2: 15–16.
- 諏訪部真友子・田中宏卓・大西一志・菊地友則・儀間朝宣・林 正幸 (2016) 南大東島における外来アリ相の経時変化と新たに定着したブギオオズアリの生態調査. *自然保護助成基金成果報告書*, (24): 85–94.
- 寺山 守・森 英章 (2014) 小笠原諸島のアリ：外来種を中心に. *昆虫と自然*, 49(9): 12–16.
- 寺山 守・久保田敏・江口克之 (2014) 日本産アリ類図鑑. 278 pp. 朝倉書店. 東京.
- Uchida, S., Mori, H., Kojima, T., Hayama, K., Sakairi, Y. & Chiba, S. (2016) Effects of an invasive ant on land snails in the Ogasawara Islands. *Conservation Biology*, 30(6): 1330–1337.
- Wetterer, J. K. (2012) Worldwide spread of the African big-headed ant, *Pheidole megacephala* (Hymenoptera: Formicidae). *Myrmecological News*, 17: 51–62.
- 山根正気・幾留秀一・寺山 守 (1999) 南西諸島産有剣ハチ・アリ類検索図説. 831 pp., 24 pls. 北海道大学図書刊行会. 札幌.
- 山根正気・原田 豊・古川博文 (2019) 鹿児島県本土に定着した外来性オオズアリ属の2種. *Nature of Kagoshima*, 46: 239–241.

## 5 7 2 (Hem.: Pentatomidae) コブハナダカカメムシ幼虫を初確認

奥園元晴 (佐賀大学・農学部)

コブハナダカカメムシ *Neocazira confragosa* Distant, 1883 は九州のみに産し、報告例が極めて少ない種である (石川ら, 2012). 三宅 (2014) は、成虫がスダジイ (ブナ科) の枝から吸汁したことや卵の外観を報告した. また、奥園 (2018) は成虫がヤブムラサキ (シソ科) の枝から吸汁したことを報告した. しかし、依然として幼虫期の形態等、未解明な点が多い. 筆者は 2018 年に本種の終齢幼虫を採集したため報告する.

[採集標本データ]

1 nymph, 福岡県北九州市小倉南区志井, 22. VIII. 2018, 筆者採集・保管 (図1) .

本個体は、林縁に設置されたガードレール上で発見した。三宅 (2014) の採集記録から、本種は樹冠部に生息することが示唆されるが、この個体を採集した前日は強風であったため、樹上から振り落とされた可能性がある。

三宅 (2014) 及び奥園 (2018) による寄主植物に関する報告を踏まえ、本個体にツブラジイ (ブナ科) とヤブムラサキを与えて飼育したところ、両種の枝に口吻を突き立てている様子が観察された

(図2) が、採集から数日後には死亡した。

本個体がコブハナダカカメムシの幼虫であることを確認するため、乾燥標本から左後脚を抜き取って DNA を抽出し、昆虫の DNA バーコーディング (Hebert et al., 2003) に用いられているミトコンドリア COI 遺伝子の部分塩基配列 658bp を決定した (解析方法は Elsayed et al., 2017 に準じる) 。また、2019 年 1 月 11 日に同地で採集した本種雌成虫の右後脚からも DNA を抽出し、同様の解析を実施した。その結果、両者の配列の一致率は 100% であり、得られた幼虫は本種であると判断した。なお、塩基配列の情報は生命情報・DBJ センターのデータベースに LC598192 (成虫) 及び LC598193 (幼虫) のアクセッションナンバーで登録されている。



図1. コブハナダカカメムシ終齢幼虫.



図2. ツブラジイの葉から吸汁するコブハナダカカメムシ終齢幼虫.

[引用文献]

Elsayed, A. K., Ogata, K., Kaburagi, K., Yukawa, J., & Tokuda, M. (2017) A new *Dasineura* species (Diptera: Cecidomyiidae) associated with *Symplocos cochinchinensis* (Loureiro) (Symplocaceae) in Japan. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, 23: 81–86.

Hebert, P. D. N., Cywinska, A., Ball, S. L., & deWaard, J. R. (2003) Biological identification through DNA barcodes. *Proceedings of the Royal Society B*, 270: 313–321.

石川 忠・高井幹夫・安永智秀 (2012) 日本原色カメムシ図鑑第3巻. 全国農村教育協会, 東京.

三宅 武 (2014) 謎の怪虫ネオカジラ生態覚え書き. *二豊のむし*, (52): 77–79.

奥園元晴 (2018) 福岡県北九州市からのコブハナダカカメムシの採集例と食性に関する知見. *月刊むし*, (565): 53.



### 5 7 3 (Hym.: Scoliidae) 石垣島でアカスジツチバチ琉球亜種を採集

阿部純大 (九大・農・昆虫)

アカスジツチバチ琉球亜種 (ホウザンツチバチ) *Scolia fascinata hoozanensis* Betrem, 1928 はツチバチ科ナミツチバチ族に属する大型のハチである。日本においては種子島, 屋久島, 奄美大島, 沖永良部島で記録されている (長瀬, 1987)。筆者は今まで記録がなかった石垣島において本種を採集しているので報告する。

#### [採集標本データ]

1♂, 沖縄県石垣市桃里 (石垣島), 4. VII. 2019, 阿部採集・保管。

この琉球亜種を独立種として扱うべきという主張もある (日本蜂類研究会, 1982) が, 本報では同種として扱うこととした。

末筆ながら同定作業に際しご助言をいただいた河野太祐氏 (九州大学), 本稿執筆と写真撮影にご助力いただいた久末 遊氏 (同) に厚くお礼申し上げます。



図1. アカスジツチバチ琉球亜種♂。

#### [引用文献]

長瀬博彦 (1987) アカスジ・ホウザンツチバチグループについて. 蜂友通信, (27): 17-20.

日本蜂類研究会 (編) (1982) 公開討論 アカスジツチバチ, ホウザンツチバチ, オキナワルリツチバチの類縁関係について. 蜂友通信, (14): 109-112.

### 5 7 4 (Col.: Anthribidae) 西表島におけるイツスジオビモンヒゲナガゾウムシの採集例

安川怜志 (九大院・生資環・昆虫)

イツスジオビモンヒゲナガゾウムシ *Nessiodocus propinquus* (Shibata, 1980) は体長 3.2~4.5 mm のヒゲナガゾウムシ科甲虫である (森本, 1984)。本種は国内では沖縄島, 石垣島, 与那国島から, また, 国外では台湾からの記録がある (Morimoto, 1980; 森本, 1984; 東, 2002)。筆者はこのたび分布の空白地域であった西表島にて本種を採集したので, 同島初記録として報告する。

#### [採集標本データ]

1♀ (図1), 沖縄県八重山郡竹富町相良川 25.X.2020, 筆者採集・保管。

末筆ながら, 本稿の作成にあたりお世話になった今田舜介氏, また, 本調査にご協力いただいた琉球大学熱帯生物圏研究センター西表研究施設の方々に, この場を借りて厚く御礼申し上げます。なお, 本調査は, 農林水産省林野庁沖縄森林管理署ならびに環境省九州地方環境



図1. イツスジオビモンヒゲナガゾウムシ。

事務所の調査許可を得ている。

[引用文献]

東 清二 (監) (2002) 琉球列島産昆虫目録. 570 pp. 沖縄生物学会. 西原.

Morimoto, K. (1980) The family Anthribidae of Japan (Coleoptera). Part 3. *Esakia*, (15): 11–47.

森本 桂 (1984) ヒゲナガゾウムシ科. 林匡夫・森本桂・木元新作 (編) (1984) 原色甲虫図鑑 IV: 226–249. 保育社. 大阪.

575 (Bla.: Nocticolidae) 西表島におけるミヤコホラアナゴキブリ *Nocticola uenoi*

*miyakoensis* の記録

中馬章吾・西谷光平 (九大・農・昆虫)

ホラアナゴキブリ *Nocticola uenoi* Asahina, 1974 は非常に小型で、体色が乳白色であることが特徴のゴキブリである。本種は名義タイプ亜種、喜界島亜種、宮古島亜種の3亜種に分けられており、これらの亜種は前後翅の形状で区別できる(旭ら, 2016)。宮古島亜種であるミヤコホラアナゴキブリ *N. uenoi miyakoensis* Asahina, 1974 は、宮古島 (Asahina, 1974)、西表島 (鈴木, 2010)、波照間島 (杉本, 2005) に分布しているが、記録は少ない。筆者らは西表島から本亜種を採集したので報告する。

[標本採集データ]

1♂, 沖縄県八重山郡竹富町上原テドウ山, 14. III. 2020, 中馬採集・保管 (図1)。

1♀, 沖縄県八重山郡竹富町上原テドウ山, 16. III. 2020, 西谷採集・保管 (図1)。

全個体を石下から採集した。また、♀成虫と共に若虫も発見された。

末筆ながら、本報を作成するにあたり、研究施設の利用に便宜を図っていただいた琉球大学熱帯生物圏研究センター西表研究施設及び職員の皆様、文献情報と本亜種の同定についてご教授頂いた柳澤静磨氏 (竜洋昆虫自然観察公園)、文章校閲にご助力頂いた久末遊氏 (九大院・生資環・昆虫) に厚く御礼申し上げます。

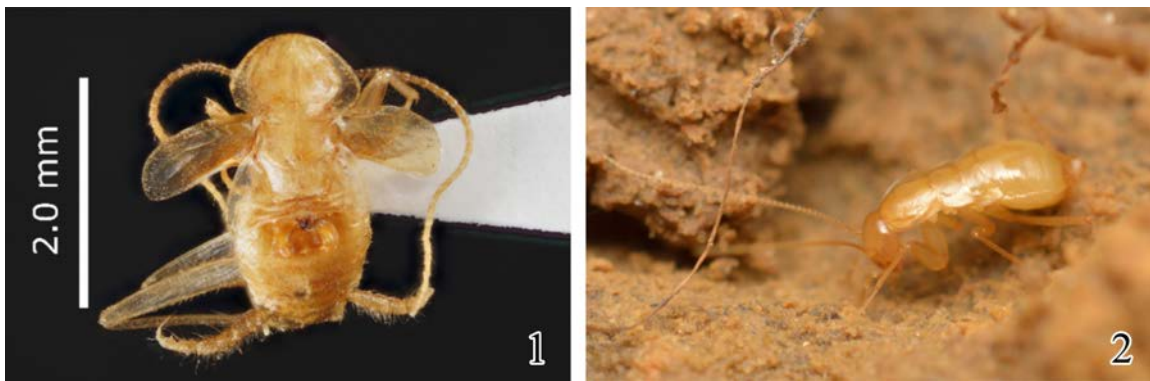


図1, 2. ミヤコホラアナゴキブリ. 1, ♂成虫; 2, ♀成虫.

[引用文献]

旭 和也・遠藤拓斗・小松謙之 (2016) ホラアナゴキブリ科. 日本直翅類学会 (編) 日本産直翅類標準図鑑: 226–227. 株式会社学研プラス. 東京.

Asahina, S. (1974) The cavernicolous cockroaches of the Ryukyu Islands. *Memoirs of the National Science Museum*, (7): 145–157.

杉本雅志 (2005) 波照間島から未記録のゴキブリ3種. 琉球の昆虫, (27): 18.

鈴木知之 (2010) 西表島にてミヤコホラアナゴキブリをイエシロアリの巣から採集. 月刊むし, (474): 45–46.

576 (Hym.: Sclerogibbidae) 西表島におけるシロアリモドキヤドリバチ *Caenosclerogibba longiceps* の初記録

中馬章吾 (九大・農・昆虫) ・三田敏治 (九大院・農・昆虫)

シロアリモドキヤドリバチ *Caenosclerogibba longiceps* (Richards, 1958) は汎熱帯性で世界的な分布を示すが、日本では鹿児島県でしか見つかっていない (寺山・須田, 2016) . 本種は 1985 年の記録 (恒吉, 1985) 以来長らく確かな報告がなかったが、近年、小松 (2015) により鹿児島県で再発見され、南西諸島にもこの仲間が生息している可能性が示唆された. その後 2017 年に沖縄本島でシロアリモドキヤドリバチ科の本邦 2 種目となるアカラシロアリモドキヤドリバチ *Sclerogibba rossi* Olmi, 2005 が発見されている (名嘉・三田, 2019) . 筆者らは西表島で新たにシロアリモドキヤドリバチを採集したのでここに報告する.

[採集標本データ]

5♀, 沖縄県西表島上原, 琉球大学熱帯生物圏研究センター西表研究施設, 寄主: シロアリモドキ *Oligotoma saundersii* (Westwood, 1837) , 13. III. 2020, 中馬採集・九州大学農学部昆虫学教室保管 (図 1) .

熱帯生物圏研究センターの場内で刈られた芝 (図 1) をシフターで篩ったところ、シロアリモドキヤドリバチの寄生を受けたシロアリモドキ類の幼体 1 個体を発見した. 寄生蜂幼虫がその後繭を作ったので研究室で飼育を試みたが、すべて繭内で死亡した. 死ごもりの個体を調べたところ、シロアリモドキヤドリバチ *C. longiceps* であることが判明した. 寄主は幼体だったが、八重山列島に分布するシロアリモドキ *O. saundersii* (Westwood, 1837) だと考えられる.

末筆ながら、本稿を作成するにあたり研究施設の利用に便宜を図っていただいた熱帯生物圏研究センター西表研究施設および職員の皆様に厚く御礼申し上げます. 本研究の一部は科学研究費補助金 (JP19H00942, JP19K06824) の助成を受けたものである.



図 1, 2. シロアリモドキヤドリバチ. 1, 蛹; 2, 生息地.

[引用文献]

小松 貴 (2015) シロアリモドキヤドリバチに関する最近の記録. 月刊むし, (528): 45.  
名嘉猛留・三田敏治 (2019) 沖縄本島から見つかった日本新記録のシロアリモドキヤドリバチ科

の1種について. つねきばち, (33): 35–36.

寺山 守・須田博久 (2016) 日本産有剣ハチ類図鑑. 780 pp. 東海大学出版部. 神奈川.

恒吉正巳 (1985) 鹿児島県産の紡脚目コケシロアリモドキの生態について. 鹿児島県立博物館報告書, (4): 23–24.

### 5 7 7 (Dip.: Hippoboscidae) 九州本土から初記録となるクロシカシラミバエ

中菌洋行 (熊本県博物館ネットワークセンター)

クロシカシラミバエ *Lipoptena sika* Mogi は, 長らく本州およびその属島の金華山島(宮城県), 宮島(広島県) からのみ知られていた種で (Yamauchi et al., 2009), 九州では近年になって五島列島野崎島(長崎県) から記録されたものの (和智, 2009), 九州本土からは未記録であった. 筆者は祖母山系の越敷岳において本種を採集しているため, ここに報告する. 採集した個体は乾燥標本とし, 熊本県博物館ネットワークセンターで保管している.

#### [採集標本データ]

1♀ (有翅個体, 図 1), 熊本県阿蘇郡高森町津留神原越敷岳, 26. XI. 2018, 中菌洋行採集.

本種の宿主としてはニホンジカ *Cervus nippon* Temminck が知られているが (Mogi et al., 2002), 越敷岳周辺にはニホンジカが高密度に生息しており, 当地でもニホンジカが宿主となっている可能性が高い. 採集されたクロシカシラミ



図 1. 九州本土で採集されたクロシカシラミバエ♀.

バエは, 筆者が林内でビーティングをしていたところ, いつの間にか白布にとまっていた. この個体がビーティングによって枝から落ちてきたのか, 自ら白布に飛来してきたのかは不明であるが, 同属のヒメシカシラミバエ *L. fortisetosa* Maa では, 捕虫網に飛来した例が知られている (Yamauchi & Nakayama, 2006; 中山, 2007).

末筆ではあるが, クロシカシラミバエの九州における記録の確認など, 様々な面でご協力いただいた山内健生博士 (帯広畜産大学), 文献の手配でお世話になった紙谷聡志博士 (九州大学) に厚く御礼申し上げます.

#### [引用文献]

Mogi, M., Mano, T. & Sawada, I. (2002) Records of Hippoboscidae, Nycteribiidae and Streblidae (Diptera) from Japan. *Medical Entomology and Zoology*, 53, Supplement 2: 141–165.

中山裕人 (2007) 九州から初めて記録されるヒメシカシラミバエ (双翅目: シラミバエ科) の生活史の一端. *昆虫 (ニューシリーズ)*, 10: 67–74.

和智仲是 (2009) 長崎県五島列島野崎島で発見された九州初記録のクロシカシラミバエ. *Pulex*, (88): 523–524.

Yamauchi, T. & Nakayama, H. (2006) Two species of deer keds (Diptera: Hippoboscidae) in Miyajima, Hiroshima Prefecture, Japan. *Medical Entomology and Zoology*, 57: 55–58.

Yamauchi T., Tsurumi M. & Kataoka N. (2009) Distributional records of *Lipoptena* species (Diptera: Hippoboscidae) in Japan and Jeju-do, Korea. *Medical Entomology and Zoology*, 60: 131–133.

## 578 (Lep.: Bucculatricidae) 九州初記録のハマボウチビガ

後藤聖士郎 (九大院・生資環・昆虫)

ハマボウチビガ *Bucculatrix hamaboella* Kobayashi, Hirowatari & Kuroko, 2009 (以下, 本種) はチビガ科に属する開張6~8 mmの小型の小蛾類で, 乳白色から暗褐色の前翅に黒鱗が広く散在し, 若齢幼虫はアオイ科のハマボウ *Hibiscus hamabo* の葉に細長く赤い潜孔を残すリーフマイナーで, 後齢幼虫はその茎に穿孔する特徴がある (Kobayashi et al., 2009). 本種は本州 (三重県, 和歌山県) に分布が知られるのみであったが (Kobayashi et al., 2010), 今回筆者は福岡県糸島市のハマボウ群生地において本種の成虫を採集し, かつ潜孔も確認したので報告する. 採集した個体は九州大学農学部昆虫学研究室に保管されている.

### [採集データ]

1♀, 福岡県糸島市前原 (加布羅) N33°. 33'44.4", E130°. 11'13.4", 8. VII. 2020, 後藤聖士郎採集 ; 1♀, 同上, 14. VII. 2020 ; 1♂2♀, 同上, 7. VIII. 2020 (図1).

筆者は福岡県糸島市前原 (加布羅) のハマボウ群生地 (図2) において, 成虫を採集し幼虫の潜孔を確認した (図3, 4). ハマボウは河口や入り江などの塩性湿地やその周辺に群落を形成する半マングローブ植物で, 関東南部以西の本州, 四国, 九州と韓国の済州島に分布する (中西, 1979, 2010). 今回本種が採集されたハマボウ群生地では雷山川・泉川下流域の両岸約1 kmに渡って200株以上が群生しており, その規模は九州内でも大きい (中西, 1979, 2001). 九州にはこの群生地の他にも, 熊本県や長崎県を中心にハマボウの生息地が数多く知られているため (中西, 2001), それらの生息地にも本種が生息している可能性が高い. 一方で, 近年では日本各地においてハマボウの生息地が護岸工事や埋め立てにより消失しつつあり, 福岡県でもその減少率は大きく, ハマボウの生息する塩性湿地の保全に注目が集まり始めている (中西, 2001, 2010). そのため, 生物多様性を視野に入れた塩性湿地の保全のためにも, 本種を含めた塩性湿地の生物相調査が望まれる.

未筆ながら, 本種の採集や執筆にあたりご助言を賜った広渡俊哉教授, 屋宜禎央博士 (九州大学) に厚く御礼申し上げます.

### [引用文献]

- Kobayashi, S., Hirowatari, T., Murase, M. & Kuroko, H. (2009) A new stem-borer of the genus *Bucculatrix* (Lepidoptera: Bucculatricidae) from Japan, with description of the life history. *Entomological Science*, 12(1): 84–90.
- Kobayashi, S., Hirowatari, T. & Kuroko, H. (2010) A revision of the Japanese species of the family Bucculatricidae (Lepidoptera). *Lepidoptera Science*, 61(1): 1–57.
- 中西弘樹 (1979) ハマボウ群落の分布と生態. 植物分類, 地理, 30(4–6): 169–179.
- 中西弘樹 (2001) ハマボウの地域別個体数と生育状況. 奥田重俊先生退官記念論文集「沖積地植生の研究」, 37–46.
- 中西弘樹 (2010) ハマボウの保全の歴史と現状. 保全生態学研究, 15: 153–158.



図1-4. 1, ハマボウチビガ♀; 2, 採集地(福岡県糸島市前原); 3, ハマボウチビガ生体; 4, ハマボウチビガ幼虫の潜孔。

### 579 (Lep.: Cosmopterigidae) 九州初記録のガマトガリホソガ

後藤聖士郎(九大院・生資環・昆虫)・行徳直久(久留米市)

ガマトガリホソガ *Limnaecia phragmitella* Stainton, 1851 (以下, 本種) はカザリバガ科に属する小蛾類で, 前翅はやや幅広い披針形で翅頂はとがり, 一様に灰色を帯びた黄土色であること, 中室内および中室端に白っぽい鱗粉で囲まれる灰黒色の点があること, 開張が♂では 12~13 mm, ♀では 16~20 mm と, 他の日本産カザリバガ科の蛾類に比べると比較的大型であることなどが特徴として挙げられ, 幼虫はガマ科植物のガマ *Typha latifolia*, ヒメガマ *T. domingensis*, コガマ *T. orientalis* の雌穂や種子, 茎の内部を摂食することが知られている(黒子, 1979, 2013; Sinev & Park, 1994). 本種はオーストラリア, ニュージーランド, ヨーロッパ, 北アフリカ, 北アメリカ, 韓国など, 世界各地に広く分布し, 日本においては, 北海道と本州, 沖縄島で記録されている(黒子, 1979, 2013; 村上, 2002; Sinev, 2002; Yoon & Byun, 2017; 富永, 2013). 本種はこれまで九州での記録はなかったが, 2015年に福岡県小郡市においてコガマから採集された. 加えて 2019-2020年の調査により, 九州大学伊都キャンパス内にある生物多様性保全ゾーンで採取したヒメガマの雌穂と茎から本種が多数羽化し, またライトトラップ(以下, LT)でも採集されたのでここに報告する. 採集した個体の一部は九州大学農学部昆虫学研究室に保管されている.

#### [採集データ]

3♀ 5 exs., 福岡県小郡市三沢, 27.V-12.VI.2015(コガマの穂から羽化), 1-31.III.2015, 行徳直久採集.

1♂, 九州大学伊都キャンパス(生物多様性保全ゾーン), 5.VI.2019, LT, 後藤聖士郎・辰巳嘉

人・牧野迪彦・岡崎諒一郎採集；1♂，同所，13.VI.2019，LT，同者採集；3♂1♀，同所，18.VI.2019，LT，同者採集；1♂，同所，20.VI.2019，LT，同者採集；2♀，同所，5.VII.2019，LT，同者採集。

2♀，同所，19.VII.2019（ヒメガマの茎から羽化），5.VII.2019，後藤聖士郎採集；37♂31♀1 exs.，同所，22.V-12.VI.2020（ヒメガマの雌穂から羽化），16.IV.2020 同者採集（図1）；7♂10♀，同所，2-12.VI.2020（ヒメガマの茎から羽化），16.IV.2020 同者採集。

本種は、小郡市で毎月行われている自然観察会（三国丘陵の自然を楽しむ会主催）の2015年2月7日、コガマの植栽されていた池のそば数か所に刈り捨てられたコガマの穂を参加者がほぐすと、中から1個体幼虫が見つかった。翌月、行徳が穂を10本余り採取し保管していると、6月初めに数個体が羽化してきた。さらに、本種は2019年と2020年において、九州大学伊都キャンパスのヒメガマから採集されたことに加え、2019年に同所で行われたライトトラップでも採集された。九州大学伊都キャンパスの生物多様性保全ゾーンにはいくつかの池が存在し、そのうちの1つにヒメガマが自生する池がある（図2）。本種が羽化したヒメガマもその池から得られたが、ヒメガマの本数は多くなかった。その上、2020年には回収した4本のヒメガマの雌穂と茎から計88個体が羽化してきたため（図3-6）、本種はヒメガマなどガマ科植物が多少生えているような小さな池においても十分な個体数の生息が可能であることが考えられる。また、2020年に採取したガマについて、雌穂と茎をそれぞれ別のケースに入れて保管したが、雌穂から69個体、茎から19個体が羽化し、これは幼虫の大部分がガマの雌穂に潜るという黒子（1979）の観察と一致した結果となった。

本種は世界各地に広く分布することから、九州他県においてもガマ科植物が生える湖沼に広く分布しているものと思われる。

末筆ながら、調査地での採集許可をくださった九州大学資産活用管理係の方々、調査に協力していただいた紙谷聡志博士、岡崎諒一郎氏、辰巳嘉人氏、牧野迪彦氏、本種の採集や執筆にあたりご助言を賜った広渡俊哉教授、屋宜禎央博士（以上九州大学）、文献の情報を教えていただいた木村正明氏（有限会社ガショウ）に厚く御礼申し上げます。

#### [引用文献]

- 黒子 浩（1979）ガマトガリホソガの発見。北九州の昆蟲，26(2): 43-44.
- 黒子 浩（2013）カザリバガ科。広渡俊哉・那須義次・坂巻祥孝・岸田泰則（編）日本産蛾類標準図鑑 3: 253-261. 学研教育出版. 東京.
- 村上正志（2002）北海道の蛾類相：苫小牧研究林の標本データベース。北方森林保全技術，20: 29-54.
- Sinev, Y. S. (2002) World catalogue of cosmopterigid moths (Lepidoptera: Cosmopterigidae). *Trudy Zoologicheskogo Instituta*, 293: 1-183.
- Sinev, Y. S. & Park, T. K. (1994) A preliminary list of Stathmopodidae, Batrachedridae, Blastodacnidae and Cosmopterigidae (Lepidoptera: Gelechiidae) of the Korean Peninsula. *Korean Journal of Applied Entomology*, 3: 194-200.
- 富永 智（2013）沖縄島初記録と思われる小蛾類3科4種の報告。誘蛾燈，(211): 23-26.
- Yoon, K. H. & Boon, K. B. (2017) Taxonomic revision of the family Cosmopterigidae (Lepidoptera) in Korea. *Journal of Asia-Pacific Entomology*, 20(3): 1032-1042.



図1-6. 1, ガマトガリホソガ♂; 2, 採集地(九州大学伊都キャンパス生物多様性保全ゾーン); 3, 伊都キャンパスで採集されたヒメガマ; 4, ガマトガリホソガの蛹; 5-6, ガマトガリホソガ成虫.

### 580 (Ort.: Pyrgomorphidae, Tridactylidae) 宮古島のオンブバッタとマダラノミバッタの採集記録

小浜継雄(沖縄県宜野湾市)

宮古島のバッタ類については、岡(1982), 大城(1986, 1988)が報告しており, また小濱ら(2002)および日本直翅類学会(2006)が同諸島の分布記録をまとめている. 筆者は, 宮古島において分布記録が不明であるオンブバッタと, 宮古諸島初記録と思われるマダラノミバッタを採集しているので分布資料として報告する.

オンブバッタ科

1. オンブバッタ *Atractomorpha lata* (Motschoulsky, 1866) (図1)

[採集標本データ]

1♀, 22.V.2016, 宮古島市学びの森, 筆者採集・琉球大学博物館(風樹館)保管.



宮古諸島においては、宮古島と伊良部島から記録されている（岡，1982；小濱ら，2002；日本直翅類学会，2006）。一方で、最近の図鑑では宮古島以南から未発見とされている（日本直翅類学会，2016）。



図1. 宮古島産オンブバッタ.

ノミバッタ科

2. マダラノミバッタ *Xya riparia* (Saussure, 1877) (図2)

[採集標本データ]

3♂2♀ 1 幼虫，13.V.2015，宮古島市大野山林，筆者採集・琉球大学博物館（風樹館）保管。

林縁の農道の湿った場所で採集された。宮古諸島初記録と思われる。

沖縄県内では、沖縄島，渡嘉敷島，久米島，石垣島，西表島，与那国島から記録されている（小濱ら，2002；日本直翅類学会，2006）。

末筆ながら，宮古諸島における昆虫相調査に種々の便宜を図っていただいた，宮古島市史編さん室の方々に感謝申し上げます。



図2. 宮古島産マダラノミバッタ.

[引用文献]

小濱継雄・市川顕彦・杉本雅志（2002）バッタ目（直翅目）。

東 清二（監）増補改訂琉球列島産昆虫目録：55–67。沖縄生物学会。西原。

日本直翅類学会（編）（2006）バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑。687 pp. 北海道大学出版会。札幌。

日本直翅類学会（編）（2016）日本産直翅類標準図鑑。384 pp. 学研プラス。東京。

大城安弘（1986）琉球列島産鳴く虫に関する研究第10報琉球列島の直翅目相。沖縄農業，21(1–2): 29–52。

大城安弘（1988）宮古島の直翅目相。琉球の昆虫，(12): 29–32。

岡 徹（1982）宮古島のカマキリ・ナナフシ・直翅目相。沖縄生物学会誌，(20): 25–29。

研究会事務所

〒819-0395 福岡市西区元岡 744 番地  
九州大学大学院農学研究院 昆虫学教室

会長

広渡俊哉

編集

紙谷聡志・屋宜禎央

(092-802-4583, yagi.sadahisa@agr.kyushu-u.ac.jp)

2020年12月31日 発行

編集兼発行者 九州・沖縄昆虫研究会